
仮面ライダー × 仮面ライダー フォーゼ & OOO & W & DCD feat EVA NOVEL 大戦 COSMO

XX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー
フォーゼ&OOO&W&DCDFeatEVAN
OVERL大戦COSMO

【Nコード】

N2504Y

【作者名】

XX

【あらすじ】

三つの世界に運びいる三つの欲望

一つは破壊者の世界に運びいる世界の破壊

一つは全ての再構成の集まった世界に運びいる世界の終末と再生

一つはライダーのいない世界に運びいる世界のやり直し

それぞれの言葉は違えどそれは全て同じ意味を持った欲望

世界の破壊者と呼ばれたディケイド

二人で一人の仮面ライダーWと欲望の王オーズ
そして新たな仮面ライダー、フォーゼ

三つの世界を守る4人の仮面ライダー、そして三つの世界に運び居
る欲望が一つになった時、戦いは宇宙へと舞い上がる！

仮面ライダーディケイド（前書き）

自分の世界に辿り着いた門矢士、時折旅に出ては世界の物語を繋いでいた士達は、世界の崩壊を止める最後の旅にでる！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

仮面ライダーディケイド

後にANGEL ATTACKと呼ばれることになった仮面ライダー達とゼーレの戦いからはや4年の年月が流れた。

それぞれ、旅に出るもの、幸せを掴んだ物さまざまな道を選んでいるが、まさに平和そのものと言える。

光写真館

「帰ってきたか」

「僕としてはお宝も手に入っただし満足だけだね」

「あのなあ…」

背景スクロールを見て呟く士、相変わらずな海東。そしてそんな海東に苦笑するユウスケ。自身の世界を手に入れたものの、気まぐれで旅が続いている光写真館一行。どうやら別の世界に旅に出て帰ってきたばかりのようだ

「でも、大樹さん。それって確か…」

祖父栄二郎の入れたコーヒーを持ってきた夏海が海東の持っている物を見て顔を真っ青にする

「そう！これはジュエルシードと言う、魔法少女には無くてはならない物だよ！まさに魂そのものだからね最高のお宝じゃないか！！」
「んな訳あるか！！」

あっけらかんと言い放つ海東に何故か片腕だけをRUKUGAの物にして殴るのはユウスケだ。海東は撃沈。そしてその海東を無視して士達はジュエルシードを前に話し合いを始める

「で、どうする？もう一度行くとしてもまたあの世界に行けるかどうかは限らないぞ？」

「ですよ…。ああ！ごめんなさい！！皆さん！！」

「まあでもあれが悪い訳だし最悪土下座でもいいし首刎ねて差し出しても良いしね」

「ユウスケ、それは過激すぎます。せめて半殺しで」

「譲歩になってないぞ？夏海」

士が中心になって話を進めるが、ユウスケの過激な案に結局まとまらなかった

「どうしたんですか？」

「いやあな、海東の奴が魂の塊であるジュエルシードとか言う宝石を盗んできてな」

「随分と大変な事になってますね」

「ああ、そうなんだ…ってお前は…！」

「お久しぶりですね、ディケイド」

いきなり士の後ろに現れたのは管理者である紅渡だ。いつの間にか辺りは夜の町並みに変化している。そして渡は士に向き合い口を開く

「ディケイド、これからあなたには最期の旅に出てもらいます」

「最期の旅…だと？」

渡の発言に士は首を傾げた。確かディケイドの空間移動能力は健在の筈。一体何故、最後の旅なのかという訳だ

「言葉足らずでしたね。正確には崩壊の危機にさらされる世界への最後の旅です」

「つまりは、その世界を俺に救えという訳だな？」

「そういうことです」

微笑みながら渡は士の問いに答えた

「それでは朗報を期待していますよ。ディケイド」

そう言つてまた辺りは写真館に戻った

「士君、どうしたんですか？」

「いや、なんでもない（最後の旅だと？まさか世界の崩壊は収まったというのか？）」

夏海が心配そうに顔を近づけているが士は意識を思考の海に落としていた

「みんな居るかい？クッキーが焼けたよ…ってわわわ…！」

クッキーの入った皿を放り出してこけるのはこの家の主である光栄二郎。無論クッキーの皿は復活していた海東がキャッチしていたが。

そして背景ロールに激突した栄二郎。その衝撃で背景ロールの絵柄が変わる

「ディケイドの…紋章？」

「まさか…ディケイドの世界？」

世界の破壊者ディケイドディケイドの世界を巡り、その瞳は何を見るこれは、かつて世界の破壊者ディケイドと呼ばれた青年門矢士と門河テル。そして二人の仲間達の新たな物語である…

仮面ライダーディケイド FINAL STORY〜ディケイドの世界〜

人は何のために生きているのだろうか？俺はこの質問こそが人類の永遠の謎だと考えている

結論を言えば人は自分の為に生きている。他人なんかどうでもいい、自分さえよければいい、それが人間の本性だ

いくらきれいごとを並べようと、いくら人のためと言おうと結局は自己満足でしかない。しかもその善意は時に悪意に変わる。誰かは忘れたがこんなことを言った人も居る『一番たちの悪いのは善意だ』と。事実、アフリカの難民達を救うために送った物資だって、何かしらの災害で被害を受けた被災者に送った物資だって、たとえ善意だとしても当事者達が望んでいるものと違うのなら何の意味も無いだろう。役に立たないのだから

そういう押しつけの善意ならいらぬ。それは偽善だ、ただの自己満足だ。だからといって偽善を否定する訳でもない。だって人は皆

偽善者なのだから。

人は与えられた情報でしか物事を見ないし、感じようとも、考えようともしない。それは仕方ない事だ。俺だってそんな人間だ。あくまでも俺の考えだから批判は甘んじて受け入れよう。それもまた一つの意見なのだから、それによって自分の視野が広がればなおの事いい。新しい視点から物事を見る事が出来るのだから、新しい発見があるだろう。それもまた面白い

だから俺は人間を悲観しない。まあ、他人の事なんて知ったこつちやないし、分かってやろうとも思わないが。人間は自分の本性を隠すから、分からない事だらけだ。些細な事で争いと起こす。まあ、人の歴史は争いの歴史なのだから、あながち間違っていないんだがそうそう、争いで思い出した。こう考えるとイジメだって無くなる事は無いだろう。どうかの馬鹿はいじめた方が一方的に悪いと言うがそれはおかしい。いじめられる方も悪い、だっていじめられるのはたいてい抵抗もしないし、やめての一言も言わない。言ったとしてもどうせ終わらないだろうが、だからといって暴力に頼るのもどうかと思う。結局、人は力を持てばそれを使いたがるから、だから原爆投下の悲劇が起こった。

さて、長ったらしく前置きをしたが、これは俺個人の意見として考えておいてほしい。いきなり地の文をやってくれと言われてとっさに思いついたのだからそこは勘弁してくれ

さて自己紹介といこうか、俺の名は門河テル。仮面ライダーディケイドだ。これでも18歳と青春まったただ中の筈なのだが特に何も思う事は無い。逆に青春と言う言葉に嫌悪感を持っていたりする。まあ、そんな事はどうでも良い

え？授業はどうしたって？別につまらないから抜け出したんだ。日本の中でもトップクラスの進学率を誇るっていうから一部には無理を言わせて一緒に受験して、合格して通っているが、手応えが無さ過ぎる。兎に角、自分の限界を知りたかったから特進科を選んで受験したの言うのに、まったく持って限界が見えてこない。不思議な

物だ

今思うとこの国の最高学府だって手応えが無い。模試なんて常に合格判定Sだし、後は出席日数さえ確保しておけば問題無し。毎日が退屈過ぎる。特に何も起こらないし平和そのものだ。…逆に平和ボケしないか心配だが

「おーい！テルー！何辛気くさい顔してんだよ！」

「ああ、カイオとカズヒトか」

廊下で歩いていた俺に声をかけてきたのは、小学生からの友である、福沢カイオと吉山カズヒトだ。二人は普通科なので滅多に会わないのだが、俺が普通科の校舎に来てるからあつたんだろ

「それにしても特進科のエースが普通科になんのようにだよ？」

「何言つてんだ。どいつもこいつもガリ勉ばつかでつまらないんだよカズヒト。普通科の奴らの方が人間味があつていい」

「それって俺らが馬鹿つてことか？」

「よくわかったな、カイオ」

「お前なー！」

「冗談だ」

こいつらをからかった方がよっぽど楽しい。特進科のガリ勉共はまったく持つて冗談が通用しないし、面白くない。休み時間でも教科書やら問題集やらを広げてる。あほらしい、そんなに必死になつて特進科にいるなら、普通科でトップ争いをした方がよっぽど楽しいだろ…と俺は思う。ちなみにこの意見を一回口にしたのだがその後ハルカに切り刻まれるとこだった。いやー、冷や汗物だった

「でもつてエンマとハルカは？」

とりあえず、一番親しい二人の所在を聞いてみる。先に答えたのはカズヒトだった

「あーっと、エンマは補習中で、光さんは職員室」

「エンマもここに進学したんなら頑張らないと留年だぜ？今までギリギリのところで進級してたけどさ」

「まあ、エンマは俺が無理言つて此処に来させたからな」

カイオの言葉に苦笑しながら答える。あいつの幸運体質はどうでも良い所で発揮されるのが大抵だ

「おらお前ら！カズマサ様のお通りだ！道をあける！」

いきなり馬鹿が吠えてきた。どうも奥の方にも成金の息子ですよと言った感じの男子生徒の姿が見える。あんな豚みたいな奴が廊下を歩いたらさぞかし迷惑だろう

「聞こえてるのか！」

「聞こえてない。聞こえない。馬鹿にかまうな馬鹿がうつる。これ、俺の考え」

「貴様！」

いきなり殴り掛かってくる馬鹿Aをとりあえず鳩尾に一撃入れて黙らせた。何でおれはこうも面倒事にことあるごとに巻き込まれるのだろう。俺の平穏な日々はいつに？

「特進科では見かけないから普通科か。一体どれだけ威張ってるんだ？」

「何でも、国会議員の息子らしいぞ？」

「つまり親の七光りか」

呆れた。4年経てば国会議員なんて職を失うというのに。俺の記憶だと、今世間では解散総選挙の噂が流れてた筈だが

「来たぜ」

「あんなの廊下を歩いてたら迷惑この上ないな」

近くで見ると出来る事なら一生かわり合いを持ちたくないような奴だ。顔みてるだけで苛ついてきた

「おい、道をあける！」

「断る。お前に指図される筋合いは無い」

どうやら取り巻きであろう馬鹿Bが言ってくるが適当にあしらっておくか。この手の馬鹿は関わりを持たない方が良い

「お前見かけないな？特進科の奴だな？」

「お前に答えて何になる。自分が損するような情報は流すつもりは無い」

無表情で会話するのは得意中の得意だ。動揺なんて見せた瞬間に終わりだしな。にしてもテンプレート通りだな。ホント、不良とかには絡み方の教科書でもあるのか？

「どうなつても知らないからな？カズマサさまに齒向かつた事を後悔すると良い」

「ならその逆も然り。俺を起こらせない方が得策だぜ？お前らも俺に関わつて後悔するなよ？」

覚えてろ！と言いながら馬鹿Bはカズマサとか言う男子生徒の元に行く。ただだけテンプレート通りなんだよ。あほらしい

「おい、テル？」

「大丈夫だ。国会議員だかなんだか知らんが、俺の人脈を甘く見てもらつては困る」

実際個人的なつながりでなら天皇陛下だろうと、アメリカの大統領だろうと、国連事務総長だろうと、世界の要人達に繋がる人脈は持っている。どこまで使えるかどうかは試した事が無いので分からないが、情報は結構入ってくるので便利この上ない

ん？何か取り巻き共が何か取り出した？あれは…ガイアメモリだと？

「どうする？テル」

既にカイオはカイザギアを腰に巻いている。別に变身しなくたってこんな奴ら…

「いい。マスカレイドメモリ程度なら变身しなくても……」

既に馬鹿共はマスカレイドドーパントになっている。…後でユキタに連絡しておいて実験台にしてもらうか…。こんな奴らは…

「生身でも勝てる！」

多分この時他人から見れば俺の瞳は紅と翠に輝いていただろう。俺が人について疑問に思い、そして軽蔑する理由の一つ

「お前！ば…化け物か！？」

この瞳を見た奴らはたいていそう言ってくる。だけどな…

「傍目から見ればお前の方がよっぽど、化けもんだよ……」

俺の右手に力が集まっていって、そして巨大な弾丸となり、あいつら

に照準を合わせる。俺が持つ、人の域を超えた力。その代償は自身の命

「天空の雄叫び、ルツジート・デイ・チェーリー!!」

周りに被害が出ないように、自分に負担がかからないように威力を最小限に押さえた一撃で、メモリブレイクを完了させる

「つつ…。やっぱり少し無茶したな…」

右手に激痛が奔った。よく見ると筋が切れてるし腕は変な方向に曲がっている、どうもあの戦いが終わってからから調子が悪い。さすがにレジエンドコンプリートを使ったのは拙かったかな？

「大丈夫かよ？」

「なんとかな。でも…大丈夫だ」

俺の力は二つ。時空制御と天候操作だ。何故そんな力があるのかは教えるつもりは無いが…。とりあえず、時空制御の力を腕にかけて傷を治す。ついでだからさっきの攻撃で壊れた箇所にも力を使って元通りに復元する、証拠隠滅完了！

「さてと、さっき気づいたんだが、別世界から来訪者が来てるようだな。…カイオ、ちよつと学校抜け出すから後よろしくいや、お前特進科だろ！？俺は普通科だ！」「…わかったよ」

最後まで言う事が出来なかったので、とりあえず昼休みまでは授業に参加しよう。にしても、誰だろうな…妥当な線としては渡か剣崎か…大穴で土も考えられるな…

〃〃〃

という訳で昼休みになった事だし、先生はうまく騙してから校門を出る。まあ、早退に関しては問題ないだろう。別に内申無くても試験で100点それば問題ない。とりあえず、時間を潰すために行きつけの喫茶店に来たんだが…

「光写真館…ということとは」

兎に角、入るかと思った矢先にドアが開き、中から見覚えのある男

女が出てくる

「お前は…門河!?」

門矢士。オリジナル 原点の仮面ライダーディケイドある意味再開を楽しみにしていた男だ

それにしても、あいつらも気配を消すのが下手だな

「よっ、久しぶりだな士。だが、再開を喜んでいる暇はなさそうだな」
「のようだな」

俺達を囲むようにして現れたのはショッカー戦闘員だ。そういえば、何チャラショッカーとか言う組織があるってユキタカが言ってたな。とりあえずそんなことはどうでも良いので、デルタドライバーを腰に巻く。士や夏みかん、雄介のリイマジも既に経にsん準備OKか
「変身!」

「スタンニンバイ コンプリート」

デルタに変身する。ディケイドは基本的に使わない。カードを使うのが面倒だからだ。本気で戦うときはディケイドを使うけどな

「ユウスケ! 夏海! 行くぞ!」

「「変身!!」」

「カメンライド ディケイド!」

「かあぷ」

ディケイド、キバーラ、クウガ。世界の旅人達がその姿を見せた

「行くぜ!」

俺は士達に、なによりも自分にそう言った

~~~~~

さて、なんとかあれを撃退した後、士達から事情を聞いてから学校に向かった。どうもこの世界での士の役割は俺達の通っている高校の教師らしい。さらに俺が所属している部活の顧問というおまけ付きで

「なあ門河、この万部って何なんだ?」

「万屋つてあるだろ？」

「ああ、何でも屋つて奴だよな」

「万部はまさにそれだ。部活の助っ人や地域の人達からの依頼の解決：あげくの果てには臨時教員と多種多様だ」

「最後のはツツコミを入れた方が良いのか？」

「臨時教員は極端な例だ。普通ならそんな依頼は来ない。でもってここが万部の部室だ」

普通科の校舎の一角にある今は使われていない古びた応接室。ここが万部の活動拠点だ

「ユキタカー、いるかー？」

とりあえず、殆ど此処に入り浸ってる生徒：俺の友達の一入である山谷ユキタカがいるかどうか見てみる。パソコンがあるってことは此処に居たな？

「あー、カイザギアの保守点検か。そういえば、ザビーゼクターとかどうした：成る程な」

忘れてた。ユキタカの奴、大の虫嫌いだった、虫見た瞬間にクロックアップレベルのスピードで逃げ出すから、カブト系のライダーシステムの点検は俺の役目なんだよ…

「というか、ここって本当に高校か？」

「一応な。というか万部が異常なだけだ。設計図さえ見てしまえばその機械を作り上げ管理することが出来るメカニック山谷ユキタカ、ダメダメのくせして幸運体質の門矢エンマ、異常な強さを持つ女剣士光ハルカ。後の二人は基調な普通福沢カイオと吉山カズヒトだ」

「確か部活の公認される条件は：部員が5名以上、顧問が居る事。だったな」

「あと部長が決定されている事。部活が出来てから一ヶ月以内、世代交代した場合は半月以内に決定する事だ」

とりあえず備品のコーヒーマーカーでコーヒを煎れながら話を続ける

「さてと士、お前が来たって事はこの世界が崩壊に向かってるって

ことだよな？しかも管理者であつた俺が対応出来ない程の」

「ああ、多分な」

「ということは心当たりはある。多分あいつの…」

俺が最後まで言い切る事は出来なかった。何故なら…

「テル君！あいつが！！」

エンマの乱入と、外からの爆発音。そして…

「出てこい、もう一人の俺…次はこの世界を破壊する！！」

黒き破壊者、仮面ライダーダークディケイドの襲来のせいだ

「ゼロ…あいつ！！土！エンマ！行くぞ！！」

俺はエンマと土にそう言つて後部室を飛び出した。すぐにエンマと土は追いかけてくる

「カイオ君とカズヒト君は？」

「あいつらは自力で行くだろ！」

とにかく一般生徒に被害が行かないように食い止めないとな

## FINAL STORY〜ディケイドの世界〜

「なんでここにあいつが！」

「しらん！」

カイオとカズヒトはダークディケイドの姿を窓から確認するとすぐに外にでていた

「9…1…3…スタンニンバイ」

カイオはカイザフォンにコードを入力してエンターキーを押し、カイザフォンを閉じて右肩まで持つて行く

「来い！ザビーゼクター！」

カズヒトはザビーゼクターを呼び出す

「「変身！！」」

「コンプリート」

「ヘンシン チェンジワップス」

黄色いフォトンブラッドに包まれてカイオは仮面ライダーカイザに、カズヒトは仮面ライダーザビーに変身する

「ほっ、カイザとザビーか」

「やっぱりあいつと同じ声で言われるとムカついてくる」

「カイオ落ち着け」

テルに似た相手を小馬鹿にした口調で話すダークディケイドに対して不快感をあらわにするカイザ。何やってんだか

「行くぜ…」

「レディ」

カイザはカイザブレイガンにミッションメモリーをセットして、ダークディケイドに切り掛かって行く

「ほっ、つと」

ダークディケイドはそれを軽く受け流しながら後ろに下がる

「カズヒト！」

「分かっている！」



ダークデイケイドの背後にはクロックアップを使って移動したザビーの姿が、このまま挟み撃ちにしてしまおうという作戦だったようだが…

「アタックライド セイリングジャンプ！」

「よつと！」

スカイライダーの能力ではるセイリングジャンプでダークデイケイドは空を飛ぶ

「なっ…!!！」

カイザはカイザブレイガンの後少しという所でザビーに振り下ろしそうになるが、そこはうまくこらえて構え直す

「ブラスターモード」

「このやる！」

「我武者らに撃ってきた所で何もない」

カイザブレイガンをブラスターモードにしてダークデイケイドを攻撃するが、攻撃されている筈のダークデイケイドはそれを避けて行く

「カイオ！落ち着け！！校舎に被害が行く！！！」

と言いつつもザビーは校舎に向かって行く流れ弾をクロックアップを使って落として行く

「これでおしまいか？」

ダークデイケイドはカイザに向かってそう問いかける

「アタックライド ブラスト！」

「なら今度はこちらの番だ」

ダークデイケイドブラストがライドブッカーガンモードから放たれる

「っ…!？」

成す術も無く攻撃を受けるカイザ。これで終わりか…と思った時

「カイオ君！大地の重力、グラヴィダ・デッラ・テラー!!」

いきなり聞こえてきた声と共に、いくつもの星が現れてその重力で弾が全て引き寄せられた

「エンマ!？」

「無茶するからだよ？」

「煩い!!」

「エクシードチャージ」

エンマはカイザに駆け寄るがカイザはそれを顧みずにカイザフォンのエンターを押す

「はっ!!」

「ぐっ」

カイザブレイガンから放たれた黄色の弾丸がダークデイケイドを拘束する

「はあああああ!!」

そしてXの字をした黄色いポインターと共にダークデイケイドを切り裂く。カイザの必殺技の一つ、カイザスラッシュなのだが…

「アタックライド インビジブル」

ダークデイケイドはインビジブルでその姿を消してしまう

「なに!？」

「ファイナルアタックライド カ・カ・カ・カイザ!」

「しまっ!？」

そして背後から放たれたのはダークデイケイドのゴルドスマッシュ。いつの間にかカイザポインターを召還していたのだ

「アタックライド コンファインメント!」

だが、その一撃は消されてしまう

「大丈夫かー?」

上空から現れたのはジェットスラッガーで飛行するデルタとフォーミュライド・ブレイドJでカメンライドしたデイケイドブレイドジャックフォームだ

「来たか、テル。それと原点の破壊者」

「へえ、まだ俺も現役のようだな」

ダークデイケイドの言葉に皮肉たっぷりに言うDブレイドJF。デルタは黙ったままだ

「今までつかずじまいだった決着を付けようぜ?そしてどっちが本物なのかをな!!」

「アタックライド ブラスト！」

ダークデイケイドはブッカーガンモードでデルタを撃つ

「黙ってる」

だがその弾丸をデルタはデルタムーバーの弾丸で全て相殺した

「今だ、ライダーステイングー！」

「ライダーステイング」

「ぐおっ！？」

今まで蚊帳の外だったザビーがダークデイケイドが油断している所に必殺技のライダーステイングを炸裂させる

「お前には用はない！消えろー！」

「がはっ！」

だが目立った一撃を与えられなかったようでザビーはダークデイケイドに殴り飛ばされる。そのまま壁にぶつかって変身解除された

「相変わらず…か」

デルタはそう呟いた後、変身を解除した

「ゼロ、お前は何故そこまで本物偽物にこだわる。お前は俺の破壊本能の具現化した存在。それなら俺と同じだろうが」

「だからこそだ。俺の破壊本能は俺を生み出した存在すらも破壊したいと言う訳だ」

「そうかよ…なら」

テルはデイケイドライバーを腰に装着する

「此処で…倒すのみ！変身ー！！」

「カメンライド デイケイドー！」

テルはデイケイドに変身する

「土。お前は手を出すな」

「おいおい、客に向かってそれは無いだろうが。手伝わせてもらっ  
ぜ」

「…好きにしる」

3人のデイケイドはライドブッカーをソードモードにして構える

「うおおおおー！！」

先に動いたのはDブレイドJF。空中からの一撃にダークディケイドは翻弄される

「そらよ！」

そこにディケイドの一撃が入る。だがそこは流石と言うべきか瞬時に反応してガードする

「後ろがから空きだ！！」

「エクシードチャージ」

だがそこにカイザがカイザポインターを足に取り付けダークディケイドにゴルドスマッシュを叩き込む

「ぐっ……」

「ファイナルアタックライド ブ・ブ・ブ・ブレイド！」

「はあああああああ！！！」

そこにDブレイドJFのライトニングスラッシュが決まる

「馬鹿……」

だがディケイドは有利な状況にも関わらず一回ダークディケイドと距離を置く

「おい、テル！何やってんだ！！さっさとトドメを……」

カイザは最後まで言う事が出来ずに地面に叩き付けられた、と思ったら直ぐに宙を舞い、そして落とされる

「カイザ！？つどわ！？」

すぐにカイザに駆け寄ろうとしたディケイド（土）だったがいつの間にか宙を舞い、地面に落とされる

「弱い」

そしてディケイド（土）を踏みつけるようにして現れたのはダークディケイド。いつの間にかアタックライド・クロックアップを使ったのだろうか

「世界の破壊者と聞いていたからな。どんな物かと楽しみにしていたがこのざまか」

「が……あ……！」

「死ね」

「君がね」

「ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ・デイエンド！」  
エンマの変身したディエンドのディメンションシュートが放たれ、  
辺りは煙で覆い尽くされる

「くっ!？」

ダークデイケイドが煙を払ったときにはそこにはテルの変身したデイケイドしかない

「お前は残ったのか？」

「最後までやつとかなないと気が済まないからな」

「確かにな」

「「ファイナルアタックライド」」

行なわれるのは必殺技のぶつかり合い

「デイ・デイ・デイ・デイケイド！」 「ダ・ダ・ダ・ダークデイケイド！」

「「はあああああああああ!」」

最近顔は合わせればこれで終わらせる二人だ。そして結果は…

「つと」

「つ…」

引き分け。ダークデイケイドはすぐにオーロラを使って姿を消す

「ちっ、やっぱりガタきてるか？」

デイケイドは膝について荒い呼吸をしている

「とりあえず、行くか」

デイケイドは変身を解除してすぐに立ち上がると大騒ぎする生徒と教職員達を尻目に学校を後にした

~~~~~

テルの自宅

「…で、此処に来たってこと？」

「そう言う事…」

玄関には仁王立ちしている少女とそれに弱気な笑みで会話をするエンマという不思議な構図が出来上がっていた

「まったく。何でもこう、兄さんは巻き込まれ体質なんだろう…良いわ。エンマさん、怪我人はお兄ちゃん部屋の放り込んで」

「ごめんね。ありがとう、サヨちゃん」

サヨ、それが少女の名のようだ。若干テルの弟であるコウガに顔立ちが似ているが、そこは気にしないことに…することも出来ないようだ

「ただいま」

「あ、兄さんお帰り」

テルが帰って来たからだ。カイオ、カズヒト、エンマの荷物を持って

「ごめん、テル君」

「別に」

エンマは自分のバックを受け取った後、二階に上がった

「悪いな、サヨ。あ、救急箱出しといてくれ」

「わかったわ」

テルは一回洗面所に言って律儀に手を洗ってうがいをした後、サヨから救急箱を受け取って自分の部屋のある二階に上がった

「さてと、大丈夫か？お前ら」

「背中打った」

「体の節々が痛い…」

「俺は大丈夫だ」

とりあえず、ボロボロになっているカズヒトとカイオに手当をした後、土が話しかけてきた

「なあ門河」

「ん？」

「お前さつき俺の破壊本能から生まれたって言ってたよな」

「まあ、それに近い事は言ったな」

「それってなんなんだ？」

「話しておくか…」

テルは一息置いた後口を開いた

「門河家は代々、常人ではあり得ない運動神経、もしくは頭脳を持っている。そしてそれは生まれつき決まっていて、大抵は隔世遺伝という形で受け継がれる」

「つまり、じいさんが運動神経抜群だったら自分も運動神経が良いつてこと。という事は親父さんは頭が良いつてことだな？」

「そういうことだ。俺のじいさんは運動神経が高かったから本来なら親父は頭脳明晰の筈だった……が」

「が？」

カイオがテルの言葉の切り方に違和感を感じて会話に入ってきた。ちなみにテルの境遇について知っているのはテルの親族とハルカ、エンマだけである。そのためカイオとカズヒトは聞き耳を立てていた

「親父にはそう言う能力が無かった。それは何を意味するか、答えはこれだ」

テルは自身の瞳を紅と翠のオッドアイに変えた

「隔世遺伝がさらに隔世遺伝を起こして、周りに回って俺に影響したんだ。だから俺には頭脳も運動神経もあるんだ」

「だから成績は常時オール5、運動神経もプロ並みなのか」

カズヒトは合点がいったらしく手を叩いた

「まあ、デメリットもあるがな」

「超巻き込まれ体質と不幸体質だよね」

「その通りだ、エンマ。ついでに言うが、この状況下だと俺の不幸体質はエンマの幸運体質で相殺されている」

「でもって、コウガが運動神経を、サヨちゃんが頭脳を持ってるのよね」

「ハルカか」

話の途中で入ってきたのは漆黒の長い髪に日本刀を腰に下げた少女、光ハルカ。テルの幼馴染みであり、何かと関係を噂されるが真相は不明。ちなみにテルに言わせると異常な強さを誇る女剣士らしいが

「そつえばサヨって、俺にも小夜っていう妹がいるんだが……」

「へー。サヨは俺の妹だ。ちなみに今は此処にいないがコウガって
いう弟もいる。ちなみにコウガとサヨは双子だ」

士の問いかけに意外だなといった表情でテルは話だ。つまり双子の
兄妹はコウガが運動神経を、サヨが頭脳をそれぞれ持って行ったら
しい

「それにしても、ユキタカの奴はどこ行ったのかしら？」

「そういえば見かけないね」

ハルカとエンマはまったく姿を見せない万部の部員の所在について
話し合ってたが…

「そういえば、アストロスイッチの調整が終わったから実験してく
るとか言って、コウガのところにいったんだっけな」

テルが所在を思い出したらしい

「ということは戻ってこないね」

エンマが分かり切っていることを言った後、士を除いた一同はため
息。そして此処にはいないテルの弟、コウガに同情していたのだった
「で、話を戻すけど、俺の特殊能力もそんなイレギュラーな事例に
よって世界と反発して生まれたんだ。士達はアスラクラインの世界
にいったか？」

「ああ。一応な」

そう言って士が懷から取り出したのは黒の拳撃とかかれたアタック
ライドのカードだった

「OK、それがあるなら話は早い。そこでの悪魔の魔力の源はなん
だ？」

「世界との摩擦…そうか！」

「ああ。俺の力は世界との摩擦によって自身の命と引き換えに放た
れてるんだ。俺の目算だと、俺の寿命は持ってあと60年かな？」

「充分だと思っけど…」

「実際はガンダム00の世界でいろいろあったからまだ大丈夫なん
だがな」

とりあえず、ここで話は一段落したのかハルカがサヨから受け取っ

たらしいコーヒーをすする

「ん、うまいな」

士はその味に目を丸くした

「さてと、それでもってこの後なんだが、ゼロの奴がどう動くかで変わって行くんだけど…「兄さん！」…どうした？サヨ」

「それが、いきなり玄関におつかない人達が！！」

「ん？」

サヨが言う通りに外の除いてみると、妙におつかない風貌の男達がいた。しかもそれを仕切っているのは…

「げ、あの糞デブかよ」

テルが啖呵を切った相手である国会議員の息子カズマサだった

「クツダラねえ。…あいつらオルフェノクとワームか」

呆れた口調で悪態をつきつつ外を見ているのと男達がオルフェノクとワームになったのだ

「テル、俺達にやらせてくれ」

カイオは既に变身準備万端になっている。カズヒトもザビーブレスレットの調子確かめていた

「…！此処は頼んだ。あいつが来た。士、行くぞ」

「ああ」

テルは目を紅と翠のオッドアイに変えると空間の断層を作り、士と共に消えて行った

「いくぜ、カズヒト」

「オーライ」

「9…3…1…スタンニンバイ」

「「变身！！」」

「コンプリート」

「ヘンシン チェンジワップス」

窓を開けて屋根の上に飛び出すと、二人はそれぞれの変身ツールを使ってカイザとザビーに変身する

「使って見るか」

そしてカイザの左腕にはリストウォッチ型のツール、カイザアクセルがあった。ちなみにファイズアクセルの色違いである

「先に行ってる」

「クロックアップ」

ザビーはクロックアップで高速移動空間に入るとワーム達に攻撃を仕掛けて行った

「俺もいくか」

カイザアクセルに取り付けられたアクセルメモリーをカイザフォンにセットする

「コンプリート」

胸部アーマーが四方向に展開する。フォトンストリームが銀色になり、複眼は黄色になる。これこそカイザの超高速形態、カイザアクセルフォームだ

「レディ」

ミッションメモリーをカイザブレイガンにセットして、カイザアクセルのスタータースイッチを押す。さらにカイザフォンのエンターを押した

「スタートアップ」 「エクシードチャージ」

「お前らなんかに…」

カイザブレイガンから放たれた光弾が次々とオルフェノク、ワーム関係無しに拘束して行く

「負ける訳ねえんだよ！」

「同感。ライダーステイング！」

「ライダーステイング」

ザビーはライダーステイングを発動させ、カイザが取りこぼしたワームを次々と倒して行く

「はああああああ！！」

カイザAFは次々とオルフェノクとワームを切り裂いて行く

「3…2…1…タイムアウト リフォメーション」

「クロックオーバー」

カイザAFは通常フォームに戻り、ザビーはクロックアップが終了する

カイザアクセルフォームのアクセルカイザスラッシュとザビーのライダーステイング、二つの必殺技によりあっという間にオルフェノクとワームは殲滅完了。後は首謀者のカズマサだけになる

「くそ…お前らなんかに!!」

「コックローチ」

カズマサは苦し紛れにコックローチドーパントに変身して逃げようとするが…

「エクシードチャージ」

「はっ!」

カイザポインターから放たれたポインターがコックローチドーパントを拘束する

「はあああああ!!」

そしてゴルドスマッシュが炸裂。だが、耐久性能をあげているのか、メモリブレイクはされない

「ライダーステイング!」

「ライダーステイング」

「そんなあああああ!?!」

そこにザビーのライダーステイングが炸裂し、コックローチドーパントはメモリブレイクされた

「さてと、警察呼ぶか」

「だな」

メモリブレイクされて意識を失っているカズマサをサヨから借りたビニールロープで縛り上げた後、サヨが警察に連絡し、カズマサは警察に御用になった

「テル達の所に行くか?」

「だよなあ…」

カイオはサイドバッシャー、カズヒトはマシンゼクトロンを呼び出すと、それに乗り当ても無く走り出した

くくく

町外れのとある廃工場

「ゼロ…」

「よう、テル。それに原点の破壊者^{オリジナル}」

テルと同じようで少し違う笑いを浮かべるゼロ。テルと土は空間の断層を通ってここに来た

「成る程…ここなら周りに被害がでることもない…か」

「ああ。わざわざ苦労して探してやったんだ。さあ、楽しもうぜ！」

「ここで…全部終わらせる！」

土、ゼロ、テルの三人は自分の変身ツール…ディケイドライバーもしくはダークディケイドライバーを腰に巻く

「「「カメンライド」」」

「「「変身!!」」」

「「「ディケイド!」」」 「ダークディケイド!」

ディケイドとダークディケイドはそれぞれ自身の武器を構える。土の変身するディケイドはさらにケータッチを取り出した

「クウガ アギト リュウキ ファイズ ブレイド ヒビキ カブト デンオウ キバ ダブル オーズ フォーゼ…ファイナルカメンライド ディケイド!!」

ヒストリーオーナメントにフォーゼのカードが足された、ディケイドコンプリートフォームになる

「さあ、始めようぜ」

ディケイドCFもライドブッカーをソードモードにして構えた

全てを破壊し、全てを繋げ！

「うおおおおお！！！」

「ふん！」

ディケイドCFがダークディケイドに突っ込むが、ダークディケイドはそれを難なく避ける。そしてディケイドCFに攻撃を仕掛けようとした…が

「カメンライド オーズ！」

「させるかよ！」

「くっ！？」

カメンライド
オーズに変身したディケイドがバツレグで跳躍し、トラクローで切りつけた

「数の上では不利…ということか…ならば！」

「アタックライド イリユージョン」

ダークディケイドはイリユージョンのカードを使い2人の分身を作り出す

「はっ！」

「やつー！」

「とおー！」

「ってどわ！？」

3人のダークディケイドの連続攻撃をくらい、ディケイドCFは後ろに後退していく

「フォームライド オーズ！ガタキリバ！」

「分身出来るコンボがあるってことを忘れんなよー！！」

50体に分身したDオーズGKBが数の暴力で一氣に3人のダークディケイドを蹴散らしてディケイドCFを助け出す

「悪い、門河」

「別に」

素っ気なくディケイドCFの謝罪に返すとDオーズGKBは新たな

カードをセットする

「フォームライド オーズ！タジャドル！」

D オーズはタジャドルコンボになり、クジャクウイングで飛翔する
「くっ！」

「アタックライド セイリングジャンプ！」

ダークデイケイドはアタックライドの力で空を飛び始める

「はっ！！」

「この！！」

「アタックライド プラスト！」

D オーズTJDはタジャスピナーの光弾で、ダークデイケイドはブラストの弾丸で銃撃戦を繰り広げて行く

「こんなにやる！！」

「ふん！」

「はっ！！」

「ぐわっ！？」

デイケイドCFは地上に残っているダークデイケイド2人を相手に接近戦を行なっていく。だが、数の上ではダークデイケイドの方が有利。一方を相手にしているともう一方が背後から斬りつけてくる
「このままじゃ…ラチ開かねえな…」

「リュウキ！カメンライド サバイブ」

デイケイドCFはケータツチの龍騎の紋章をタッチし、龍騎SVを召還する

「ファイナルアタックライド リュ・リュ・リュ・リュウキ！」

「はっはあっ！！」

「「アタックライド スラッシュ！」」

デイケイドCFと龍騎SVのバーニングセイバーとダークデイケイドのスラッシュが激突。そのまま相殺される

「なっ…！？」

「アタックライド プラスト！」

驚きで動けない所にダークデイケイドの追撃が決まった

「ちっ…新しい力…使ってみるか！」

「アタックライド クロノケンゲキ！」

ディケイドCFがディケイドライバーに装填したのは、アスラクラインの世界で手に入れたカード。音声と共にディケイドCFの銀色の部分が全て漆黒に変わる

「はああああ…」

そして右手に魔法陣が展開され、右手に力が溜まって行く

「はああああああああああ！！」

放たれるのは機巧魔神黒鐵の能力である重力球。そしてその一撃は…
「ぐわああああああ！！」

一体だけではあるものの命中し、当たったダークディケイドは消滅する

「これで2対2だぜ？」

ディケイドCFはライドブッカー・ソードモードを再び構えると、残ったもう一人のダークディケイドに言い放った

「くそっ…！！」

「よそ見してる暇無いぜ、ゼロ！！」

一方、DオースTJDとダークディケイドの本体は空中戦及び銃撃戦を続行中だった。が、ダークディケイドの一瞬の隙についてクジヤク光弾がダークディケイドに襲いかかる

「くっ！！」

ダークディケイドはライドブッカーの弾丸で迎撃するが数が多く、さらに追加されたタジャスピナーの攻撃を喰らってしまう

「流石は俺の本人格。強さは格別か…」

「何言ってやがる…お前だって俺だろうが」

「それもそうだったな。…いいだろう、俺の本気を見せてやる」

そういつてダークディケイドが取り出したのは黒色のケータッチ

「それか…お前の」

「その通りだ」

「ミラージュアギト リュウガ オーガ カリス カブキ コーカ
サス ネガデンオウ ダークキバ エターナル ポセイドン コア
…ファイナルカメンライド ダークディケイド！」

ダークディケイドの姿が変わる。基本カラーはそのままだが、ヒストリーオーナメントが装備され、そこにはダークライダー達のライダーカードが配されている。頭部のディケイドクラウンには現在のダークディケイドの状態のライダーカードが出現、その後ダークディケイドライバーのバツクル部を外してケータッチをセットしバツクル部を右腰に装着した

仮面ライダーダークディケイドコンプリートフォーム。全ての世界のダークライダーの力を手に入れた、ダークディケイドの最強形態だ
「いくぞ…！」

「っ…！？」

ほんの一瞬で距離を詰めたダークディケイドCFはDオーズTJDをライドブッカードで一閃する。一気に地面にたたき落とされたDオーズTJDはそのままディケイドに戻る

「門河…！」

「っ…土か」

そこにダークディケイドの分身が消えたためにフリーとなったディケイドCFが走ってくる

「あれは…」

「見れば分かるだろ…？」

「今度は負けんぞ。本調子でないお前等、雑作も無い」

「だろうな…」

「どういうとこだ？本調子じゃないって…」

「土、聞け。あいつは普通のコンプリートフォームじゃ倒せない」
ダークディケイドCFの言葉にディケイドCFは疑問を感じてディケイドに話しかけたが、ディケイドはそれを遮って話を始めた

「あれは…ダークディケイドの最強フォームだ。通常状態でも高いスペックを持っているダークライダーがさらにパワーアップしたん

だ！言いたい事は分かったな？」

「ああ、大体分かった」

ディケイドCFはケータッチを取り外すと、ケータッチに装填していたカードを取り替える

「アメイジングアルティメット ゴットトリニティ フォースサバイブ ブースターブラスター ロイヤルキング ショウゲン マスター スーパークライマックス ラストエンペラー デイザイアエクストリーム タトバリング！ファイナルフォームカメンアタックライド デイ・デイ・デイ・ディケイド！」

金色のボディにマゼンタ色のマント。真・最強フォームのライダーカードが配されたヒストリーオナーメント。仮面ライダーディケイドの真・最強フォーム、パーフェクトコンプリートフォーム、ここに降臨

「ハア：ハア：ハア：。悪い、ここで限界みたいだ！」

ディケイドPCFが強化したのと同時にディケイドは倒れ変身解除された

「ああ、ここからは俺に任せろ」

「ふん。お前には別に何にも用はないが、邪魔をするなら消えてもらおうか」

どちらも相変わらずライドブッカーソードモードを構えると…

「うおおおおおおお！！！」

ぶつかり合った

くくく

力の使い過ぎか？こんな所で倒れるとはな！まだまだ鍛え方が甘かったか？。ん？起き上がれない！だと？

ちっ、まさかここまでガタが来てたとは自分でもびっくりだ。こんな状態で戦ってたんだから今更ながら自分の異常性に感服する

自分の事だろう？と思うだろう。だが、自分のことは自分が一番分

からないからな…人が独りでは行きて行けないのはそう言う事だ。
そしてこんな状況で何故人について語っているのかも分からん
とりあえず、うつ伏せの間までもあれなので仰向けになろうとした
が、体中に痛みが走ってきたので止めておこう。お、首くらいなら
上がるか

「うおおおおおおお!!」

…頭をあげてみたら、ゼロと士が対峙していた。ダークデイクイド
CFとデイクイドPCF。スペック上はパーフェクトの方が上だけ
ど…ゼロは俺の同位体だからな…どこまで食い下がって行くのやら…
「はっ!!」

「っ!？」

「おりゃあ!!」

お、士もだいぶ強くなってるな。だけど、ゼロも流石と言えば流石
だ、士の斬撃を紙一重で避けてやがる

俺個人としては士がゼロの奴を倒してくれば何とかなると踏んで
いる。実際、ここまで俺が疲労しているのも奴と分離してから(…
…・…・)…だからな

~~~~~

「この程度か!真・最強フォームとやらも!!」  
「なわけねえだろ!!」

ダークデイクイドCFとデイクイドPCFの刃が何度も混じり合う。  
その度にキンという硬質かつ鋭い音と火花が散る

「「アタックライド スラッシュ!」」

「おりゃあ!!」

「ふん!!」

強化された刃同士がぶつかり合う。しばらく鏖迫り合いに移行した  
後、すぐに間合いをとり構え直す

「次は銃撃戦と洒落込むか？」

「望む所だ！」

「「アタックライド ブラスト！」」

次はライドブッカーガンモードから放たれる弾丸での銃撃戦。どちらの確に相手を狙い、そして弾丸同士がぶつかり合い相殺される。時折相殺されなかった弾が両者共に襲いかかってくるが、うまく転がって回避した後またも弾を放つ

力量は互角、力も互角。こうなると勝敗を決めるのは変身者の潜在能力と戦闘経験で養われた実力のみ

「ふん！！」

「なっ…？」

いきなりダークデイケイドCFがライドブッカーをソードモードにしたかと思うとそれを何も無い空間に一闪。すると空間に裂け目が現れ一気に間合いが詰められる

「しまっ…！」

「遅い！！」

至近距離からの斬撃。今までの拮抗した戦いが嘘のようにデイケイドPCFはされるがままにされ吹っ飛ばされる

「くっ…そ…」

すぐに起き上がって体制を立て直そうとするが…

「ふっ！」

またも空間の断層で瞬間的に移動したダークデイケイドCFによって斬りつけられる

「がっ…！」

「弱いな」

「が…あ…」

そのままダークデイケイドCFはデイケイドPCFを踏みつける

「これが、真・最強フォームの力…か？弱過ぎるな」

そしてダークデイケイドCFはライドブッカーSMを振り上げると…

「さらばだ」

振り下ろそうとした。だがその行動はどこからとも無く飛んできた

シアン色の光弾によって阻まれる

「そりゃあ、お前やテル君からみたら弱いだろうし、僕たちの攻撃も蚊が刺す程度かもしれないね」

「だからといってそれで諦める訳には行かないけどね」

「お前ら…」

立っていたのはエンマと海東。ある意味ディケイド二人の相棒的な存在だった

「ディエンドか…何故ここが分かったのかは追求しない事にしよう。だが！お前らを生きて返す訳には行かない！」

「なら、それを覆してあげようか」

エンマはカメンライド・ディエンドのカードを、海東はエンマから渡されたファイナルカメンライド・ディエンドのカードを自分のディエンドライバーに装填する

「カメンライド」「ファイナルカメンライド」

「変身！！」

「ディエンド！」

仮面ライダーディエンドとディエンドコンプリートフォーム。世界をまたぐ大怪盗ここに降臨

「っ…、まだ…無理か…」

テルはまだ起き上がれないようでうめき声を漏らしながらダークディケイドCFを睨みつけた

「アタックライド プラスト！」

「アタックライド スラッシュ！」

ディエンドCFのプラストと、ディケイドPCFのスラッシュがダークディケイドCFに放たれるがダークディケイドCFはバックステプで避けて行く

「やっぱり…避け方も同じか！！」

「何！？」

そこに背後に回っていたディエンドがディエンドライバーで撃つ

「くっ…何故だ…」

「テル君の同位体なんだから、根本的な所は同じなんだろう？だったら行動も読み易い。中学からの付き合いだしね」

「アタックライド ブラスト！」

「はっ！！」

「ぐわっ！」

余裕ではないようだが、軽い口調でダークデイケイドCFに言い放った後、ディエンドはブラストを使用して距離をとる

「おりゃあ！」

「はっ」

「小癪な！！」

そこにデイケイドPCFとディエンドCFの蹴りが入るが、それを避けるとすぐにパンチをディエンドCFに決め、さらに回し蹴りでデイケイドPCFをディエンドの元に蹴り飛ばす

「アタックライド ブラスト！」

そしてダークデイケイドブラストでデイケイドPCFとディエンド、さらにディエンドCFを狙撃して行く

「ぐわああああ！！！！」

破壊力は半端ではなかった。ただのブラストである筈だというのに…

「さてと、外野はいなくなった。さあ、始めようぜ」

「っ…！」

ダークデイケイドCFを睨むテル。だがその表情には辛さを感じ得なかった

「ハア…ハア…。ああ、良いだろう。決着を…つけるぞ！！」

テルがライドブッカーから取り出したのは金色に光り輝くカード

「変…身…！！」

「ファイナルレジェンドカメンライド デイ・デイ・デイ・デイケイド！」

金色のボディ。紅と翠のオッドアイとなった複眼。純白の翼。ヒストリーオーナメントは各ライダーの紋章となった姿。仮面ライダーデイケイドレジェンドコンプリートフォーム

「あまり長くは変身できないんでな…。一回だ。一撃での真剣勝負、これで決めるぞ」

「いいだろう…負けた方は…消える!」

デイクイドLCFとダークデイクイドCFは自身の必殺技のカードを、デイクイドライバーもしくはダークデイクイドライバーのバツクル部にセットし、叩く

「「ファイナルアタックライド」」

「「はああああ…」」

ソードモードになったライドブツカーに、デイクイドLCFはマゼンタと金色の力を、ダークデイクイドCFは黒と青の力を溜めて行く  
「何だこりゃ…」

「空気が…震えている…?」

「っ…。テル君も加減無しか…」

デイクイドPCF、デイエンドCF、そしてデイエンドはなんとか起き上がって状況を確認する

「そつえば門河の奴、無意識に加減したって言うてたな…」

「はい…。一回マジ切れしたときに完全解放をやっちゃってて…」

半径1km以内が焦土と化しました」

「それって大丈夫なのかい?」

「この工場は総面積60平方km。テル君とゼロの必殺技が本気でぶつかり合った時に発せられる衝撃の有効範囲はユキタカの試算だと半径3km。恐らく大丈夫です。ただしこれはあくまでも通常対コンプリの試算。コンプリ対レジエンドだと…単純計算でも半径10km…ですかね」

「結構危険だね…だからといって周辺住民の皆さんを避難させるわけにはいかないか…」

「無理ですね。たまに万部としての活動で一時的な退去を願った事はありませんけど…、今回は私情なんで無理です」

軽く異常なことを言ったデイエンドだったが、三人はそんな事も気に留めずにデイクイドLCFとダークデイクイドCFの方を向く

「ゼロ…今一度問う、何故そこまで本物にこだわる？」

「さあな…それが俺の本能なんだよ…」

「…そうか。ならっ…！」

ディケイドLCFは翼をはためかせて、目の前に展開されたホログラムカードをくぐり抜けて行く

「終わらせるぞ…！」

ダークディケイドCFもまた走り出し、ホログラムカードをくぐり抜けて行く

「…うおおおおおおおおお…！」

「ディ・ディ・ディ・ディケイド！」 「ダ・ダ・ダ・ダークディケイド！」

超強化ディメンションスラッシュと強化ダークディメンションスラッシュ。二つの力が

「…はあああああああああああ…！」

ぶつかり合った。その瞬間爆煙が辺りを包む

「うわっ…！」

「っ…門河とあいつは…！」

「…あそこです！」

ディエンドが指差した先には互いに背を向け合った状態で離れているディケイドLCFとダークディケイドCFの姿が

「どっちが…勝ったんだ…？」

「っ…」

「テル君！」

最初に膝をついたのはディケイドLCF

「俺の勝ち…ぐはっ！」

振り返り、勝利宣言を出そうとした矢先にダークディケイドCFが倒れる

「馬鹿…な…」

そのまま変身が強制解除され、ゼロは信じられないと言った表情でうつ伏せに倒れる

まるで時代劇の果たし合いさながらの決着の付け方だった

くくく

「…ゼロ」

変身を解除したテルはゼロに歩み寄る

「…俺の負けだ…お前の好きにしろ」

仰向けになって目をつぶるゼロ。死ぬ気なのだ

「…お前…俺に戻ってこないか？」

「何…？」

「ちよっ…テル君!？」

テルの口から放たれた発言に目を丸くするゼロとエンマ。ゼロの出生を知っているエンマにしてみればそりゃあ驚く事だろうが

「エンマ、これは俺達の問題だ、黙ってる」

「う…うん…」

エンマを制した後テルはゼロに向き合う

「ゼロ、お前は俺の破壊衝動から生まれた存在。俺の兄弟みたいなもんだ。だが、コウガやサヨみたいな兄弟じゃないってことは分か  
つてる」

「だからどうした…？」

「その破壊本能を今度は押さえ込む！そのために鍛えてきてるんだ  
からな」

「ふっ…お前らしいな。結局、何時まで経っても変わらない物は変  
わらないか…」

「人間はそう簡単には変わらないよ」

「ふっ…それもそうだ」

二人はひとしきり笑った後、向かい合う

「俺が戻ればお前が失っていたものも戻るだろうな」

「主に破壊に関する本能がな」



「そつだ、同化する前にお前達に言っておきたいことがある…」  
そしてゼロの口からある言葉が放たれた

N E X T    W & a m p ; O O O    s i d e !

## 仮面ライダーOOO&W（前書き）

舞台はANGEL ATTACKから4年後、高校生活最後の年。  
戦いの中心にいた一つのカップルが結ばれる前日に事件は起こる。

これで決まりだ！

俺が変身する

## 仮面ライダー○○○&W

ドイツ とある森林

ここに黒いマントを羽織った男と巫女装束を来た女性が来ていた

「ここか…」

「はい。ここにあの最高の錬金術師でるガラが眠っているそうです」

「成る程な。…行くぞ、奏」

男が取り出すのは鋼色のメダル。それを自身の影に投入する。その瞬間、影の形が変わって行く

「…来い、鋼！」

「闇より深き融炉より出でし…」

奏と呼ばれた女性の声音が少しずつつかすれて行き、機械のような重低音になつていく

「其は科学の槌の鍛えし玉鋼！」

影より現れるのは鋼色の巨人、機械仕掛けの悪魔であり最強の機巧魔神<sup>マキナ</sup>鋼。だが機巧魔神は全て非在化した筈だった

「やれ」

鋼の腕に重力球が作り上げられ、それを地面に叩き付ける。そこには…

「メダル…のような蓋か」

「夏目君、どうしますか？」

「決まってるだろ。こじ開ける」

鋼が再び動き出す。蓋をこじ開けようと、両端を持って引っ張り上げた。その瞬間

「っ！？これは…！」

「セルメダル？きゃっ…！」

蓋を開けた場所から大量のセルメダルが溢れ出してきたのだ。そして巨大な塔を作り上げて行く

「何が！くっ…、鋼を戻すぞ！」

「はい」

夏目と呼ばれた男の影に鋼は戻って行く。そしてその場を離れようとした所に…

「しまっ！？」

「夏目君！」

二人は塔から現れたセルメダルの腕に拘束されてしまい、そのまま塔に引きずり込まれる

そして、塔を中心として円が描かれ、まるで大地がメダルのように浮かび上がって行ったのだった…

仮面ライダー OOO & a m p ; W W E D D I N G 将軍と21の  
コアメダル

所変わって日本 第3新東京市内

「授業やつと終わったー！」

「和葉、まだ午前中だぞ？」

スマートブレインハイスクール。世界の融合の前にはファイズの世界にあった高校だが、今は再構成の世界が融合したこの世界にある。リ・イマジネーションそして教室から出てきたのは、4年前のANGEL ATTACKにおいて仮面ライダーオーズとして戦った夏目智春の義妹である苑宮和葉と、仮面ライダーWの片割れ翡翠セツナである

現在時刻は午後12：45分。丁度お昼休みの時間帯のため生徒達は購買に向かったりお弁当を広げたりと思い思いのことをしていた  
「おーい！セツナ！和葉！」

「お昼食べよ！」

そこにお弁当を持ってきたのは温和な感じの少年と金髪碧眼の美少女。少年の方は仮面ライダーW及び仮面ライダージョーカーとして戦った碇シンジ。少女の方は仮面ライダーイクサとして戦った惣流アスカである。ちなみにカップルまたはバカップル、正確には婚約者どうしである

「そうだな。あ、今日弁当作ってないんだっ…」

セツナは幼い頃から一人暮らしで弁当は自分で作っているのだがたまに寝坊とかその他諸々の要因で弁当を作ってこないときがある。今日はたまたまその日に当たったのだ。といっても、落胆しているセツナに救いの手は差し伸べられる訳で

「セツナ、お弁当多めに作ってあるからさ」

「和葉、お前はエスパーか？」

「いいじゃないの。…たまに作っちゃうんだよ…お兄ちゃんの分」

「トモ兄か…そういうばどうしてるんだろっね？」

「連絡ないし、手紙を送るうにも住所不定だもんね…」

和葉の口から出てきた言葉から、仮面ライダーオーズであった少年、夏目智春の話になる4人。弁当食べなくていいのか

「あ、でも悪いな和葉」

「いいつてこのくらい」

「早く食べよ。時間無くなっちゃうし」

「そうね」

すぐに話題を切ったあと、4人は教室でお弁当を広げるのだった

さてそれから数時間後。学校も終わり部活に行く者は部活に行ったり、部活の無い者は帰宅したりと思いきいの放課後を過ごすことになる

「それじゃあ、部室にいこうよ」

「だな…朱理姉も来てるだろうしな」

「奏先輩もじゃない？」

「ミサ姉…今日は休みか」

「うん」

シンジ達4人が向かっているのは化学準備室…もとい科学部の部室である

「こんにちはー」

「あ、みんな来たんだ」

「何でここにいるの？ミサ姉」

「気にしないでアスカ。私も呼び出されたから」

「大体分かった…朱湮さんか…」

「ご名答！流石はセツナね」

セツナの呟きの後タイミングを測ったかのような絶妙なタイミングで化学準備室に入ってくるのは科学部部长である黒崎朱湮だ。セツナは呆れたように

「どうでもいいです。それで何のようなんですか？」

「ええ。それが直貴さんから連絡があつてね、危ない事が起こるから対処してくれて内容の」

「なんとというアバウトな…」

朱湮のアバウトさに頭を抱えるメンバーだったが、兎に角そんな事は行つてられない

「市街地に出てみましょう。何か分かるかもしれない」

「それじゃあ、僕とアスカ、それにミサ姉が調査に出るから…セツナは集めた情報から検索をお願いしたいから残つて。和葉も残つててくれる？何か嫌な予感がしてならないからさ。あとカナ姉や樋口先輩、それにニアにも状況説明をして待機してもらつて」

「分かった」

アスカの提案を聞いた後シンジが細かい計画を決める。朱湮は基本的に傍観者だ。実際、第3生徒会の<sup>ロイヤルダークンサエティ</sup>王立科学狂会の会長も兼任しているのだから部活をしている暇も無いのだろう

「それじゃあ、出発！」

操緒の号令で、シンジ、アスカは化学準備室を出て行った

「大丈夫なのか…嫌な予感がしてならない…」

~~~~~

第3新東京市市街地

「にしても…平和だね」

「4年前が嘘のようね…」

とりあえず二手に分かれようという事になり、操緒は一人で、シンジとアスカが二人でそれぞれ見回りをしていた

災害は忘れた頃にやってくる。まさにその通り、それはいきなり起こった

「シンジ！あれ！！」

「えっ…！？」

いきなりシンジとアスカの目の前に線が引かれる。そして浮かび上がって行くのだ

「そんな…まさか！」

そして反転するとまた元の位置に収まって行く。そこにあったのは…

「森？」

「これって黒森！」
シュバルツバルト

「知ってるの？」

「ドイツにある森林よ。植林したモミの木が密集して生育しているために黒く見えるの」

「何かあるのかもしれない、急ごう」

「ええ」

シンジとアスカは走り出した

「これって…」

「おい、操緒！何が起こってやがる！？」

「アंक！よくわからないけど…何かが起こってるんだよ！」

「まあ、いい。嫌な予感がする行くぞ」

操緒と合流したアंकも森に向かって走り出した

そして内部に入ると、中心に立っている塔のような建造物からナイト兵が大量に現れる

「さてと…それじゃあ久しぶりに行きますか」

シンジはダブルドライバーを腰に巻く

『シン、どうした？』

「まっ、いろいろあるんだよ」

「ジョーカー！」

『まあいいさ。和葉、俺の体頼むぞ』

「サイクロン！」

化学準備室にいるセツナとダブルドライバーを介して話をした後、それぞれのガイアメモリのガイアウィスパーをならす

「アंक！メダル！！」

「ちっ、無くしたらただじゃ置かねえからな！」

現場についた操緒とアंक。操緒はアंकから赤黄緑のメダルを受け取るとオーズドライバーを腰に巻き、メダルをセット、そしてオーズキャナーでスキャンする

「『変身！』」

「サイクロン！ジョーカー！」

疾風と切り札の協奏曲が辺りに鳴り響き、シンジは仮面ライダーWサイクロンジョーカーに

「タカ！トラ！バッタ！…タットツバ、タトバ、タ・ト・バ！」

奇妙な歌が流れ操緒は仮面ライダーオーズタトバコンボに変身した

『そういえば、アスカさんは変身しないのか？』

「あー、それがママに取り上げられちゃって…。嫁入り前の娘が戦うんじゃありません！ってさ」

『そういえば、今日が6月5日だから…明日かシンとアスカさんの結婚式って』

「そう言う事。アंक、アスカのことお願いね。いくよー！」

「うん！」

WCJとオーズTTBはナイト兵に向かって走り出す

「はっ！はっ！」

『シン！3時の方向から来てる！』

「了解！」

WCJは戦い慣れしており、複数戦も数多くこなしているため次々とナイト兵を蹴散らして行く

「どうやら、ヤミー擬きみたいだね。セルメダルが出てきた」

『だな。シン、一掃するならこっちの方が良い』

「オツケー」

WCJが取り出したのは黄色のメモリ

「ルナ！」

そしてサイクロンメモリとルナメモリを交換してバツクルを開く

「ルナ！ジョーカー！」

幻想の切り札、ルナジョーカーになったWは右半身をゴムのように伸ばして攻撃する

「決めるよ！」

WLJはジョーカーメモリを右腰のマキシマムスロットに差し込んで叩く

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

正中で分離すると、ルナサイドが分身して連続攻撃を行なう。そして「『ジョーカーストレレンジ！』」

ジョーカーサイドのパンチを叩き込み、一気に周りのナイト兵を一層した

「行くよ！」

「サイクロン！ジョーカー！」

Wは再びサイクロンジョーカーになりナイト兵を倒して行く

「はっ！はあっ！」

一方オーズTTBは若干ぎこちない動きながらも着実に敵を倒して

行く

「操緒！このメダル使え！」

「オッケー！」

アंकが投げたのは緑色のメダル。それをオーズドライバーのタカメダルと交換する

「クワガタ！トラ！バッタ！」

頭部がクワガタヘッドになった亜種形態ガタトラバになる

「はっ！！！」

オーズGTBはクワガタヘッドからの電撃でナイト兵を倒して行く
「次だ！」

アंकはさらに黄色のメダルを投げる。今度はバッタメダルと交換してスキャンした

「クワガタ！トラ！チーター！」

脚部がチーターレッグになり、ガタトラーターになったオーズはチーターレッグのスピードを生かして走り出し、トラクローで切って行く

「今度は…これだ！」

次に投げられたのは青のメダル。今度はトラメダルを取り替えてスキャンする

「クワガタ！ウナギ！チーター！」

腕部がウナギアームになった亜種形態ガタウーターになったオーズはトップスピードを維持したままウナギウィップとクワガタヘッドのW電撃で次々とナイト兵を蹴散らす

「よつと！」

「タカ！トラ！バッタ！…タツツバ、タトバ、タ・ト・バ！」

オーズTTBに戻ると、そのままメダジャリバーでナイト兵を蹴散らして行く。だが…

『キリが無いぞ！こいつら！！』

「どうすれば…」

倒しても倒しても増え続けるナイト兵達にさすがに戸惑いを感じる

WCJとオーズTTB、このままでは疲弊するばかりだ

「アंक！緑のコンボ！」

「ダメだ！お前はコンボに耐えうる器じゃない…。智春だったら任せていたがお前じゃ無理だ！」

オーズTTBの言葉にすぐさま反論するアंक。実際、智春は最初の変身の際にコンボを連続して使用したがまったく持つて疲労を見せいでなかった。だが操緒は初変身時にコンボを使った後疲労で倒れてしまっているのだ

「第一、この状況でコンボを使って倒れてみる…。お前の命も危ないし、メダルだってどうなるか分からん！」

「…むう」

明らかに劣勢は必至なのだが、それでも戦い続けるWとオーズだが、いきなり攻撃が止む

「何だ？」

「攻撃が…止まった？」

そして塔の扉が開き、中から現れたのは古風な服を来た何かであった

「800年の眠りから覚めたが…。欲望は無くなるどころか、増えておるな…」

「お前は…何者だ？」

少しエコーの掛かった女性の声で喋る存在…。その名は…

「我が名はガラ。欲望にまみれた世界を破壊し新世界の王となるものだ！」

ガラがそう言った瞬間、辺りに風邪が吹き荒れた

「この世界を破壊する？世界の破壊者でも出来なかったことをお前がか？」

「シン？」

「ざけんなよ！」

WCJはまるで怒りを繁栄させたかのような暴風を纏った拳でガラに殴り掛かる

「ぐっ…。成る程のお…。だが！」

ガラはすぐに体制を立て直す

「まあいいだろう。コアメダルは頂いて行くぞ」

ガラが持つている杖から風が吹く。それと同時に…

「しまった!？ぐっ!!」

アंकの持つメダルケースからコアメダルが全て奪われる。無事だったのはオーズに使っているタカ、トラ、バツタのコアメダルとアंकを構成しているタカ、クジャク、コンドルのメダルだけだ。だが…

「えっ… キャツ!!」

オーズドライバーにはめ込んでいたメダルまでもがガラに奪われる

「ちっ!!」

「そんな…」

それと同時にオーズTTBも変身解除。操緒はやはり戦闘経験が浅い分疲労で倒れてしまう

「オーズドライバーも貰うぞ!!」

ガラがオーズドライバーを拾おうとしたその時、紫色の何かがオーズドライバーを奪い去って行った

「何？」

一瞬だけ見えたのは恐竜グリードギルの姿。そしてギルはすぐに姿を変える

「トモ兄!!」

「久しぶりだな。みんな」

恐竜グリードギルこと夏目智春。そして智春の姿を見たガラは

「まあ良いだろう。今回はこのくらいにしておこう」

塔の中に引き返して行った

「何起こってるかは知らないけど… 兎に角ここから出よう」

『分かつてる』

智春の先導の下、WCJ、操緒、アスカ、アंकは森から出て行った
シンジ達が森から出て行った後、シュバルツドルツ黒森のある地点は強固な結界に覆われるのだった

くくく

メダルの塔 内部

「っ…っ…」

「ここは…?」

奏と夏目の二人は、玉座や石盤、実験器具のような物がある部屋で目を覚ました。自分達のいる場所は穴の上に浮いた板の上だったが、そして玉座に座っているのはガラである

「お前が、ガラか?」

「その通りだ」

夏目の問いかけに尊大な態度で返すガラ。そしてガラはセルメダルを実験器具のような物に投入する。すると、道化師のような格好をした少女が姿を現した

「ほう、グリードでも無いのにメダルから生命体を作れるのか」

「我はかつて王に使え、コアメダルを作った。我に不可能はない。これを」

ベルと言うセルメダルの少女を2人作ったガラは、一人にはコアメダルを石盤にはめ込むように指示し、もう一人にはある命令を出したのだった

くくく

第3新東京市 第3新東京駅前

シュバルツドルツ

黒森から逃げ出してきたシンジ達は智春に駅前まで連れて行かれた。ただ単に智春が荷物をとりにきただけなのだが。ちなみに智春の荷物はバースドライバーやバースバスター、それに着替えが入ったスリッパだけというシンプルな物だ。財布は持ち歩いている

「トモ、いつ帰ってきたの?」

「昨日だよ。風の便りでシンと惣流の結婚式がもうすぐって言うの」

を聞いたからさ。言っただろ？二人の結婚式の時には帰ってくる
て」

高校生も終わりに近づき中学生の時とは違う雰囲気を持つ操緒の变化に若干戸惑いを見せつつもいつも通りの態度で接する智春だ。ちなみにさすがに成長しないのは拙いと感じているようで智春の外見上の年齢は操緒と同じになっている

「いや、ミサ姉が聞きたいのは何で連絡しなかったのかって事だと思っ……」

「あー、いや、その……」

シンジの指摘にしどろもどろになる智春。そこにアंकが鋭い一言「智春、お前忘れてた訳じゃないだろうな？」

「……」

「図星か」

とりあえず沈黙した智春は放っておいて、シンジはセツナに連絡をした後この後の予定を話し合う

「とりあえず、制服だと目立つし一回学校に戻ろう。話はそれからだ」

「そうね」

と、シンジの提案で帰ろうとしたそのとき、いきなりベルの音がする「何だあれ？」

駅前にいた人々が一齐に音のした方向を見る。そこには道化の格好をした少女がワゴン車を引いて歩いてくる姿が

『貴方の欲望をかなえるチャンスタイムです。100万円を手に入れる事が出来る代わりにあなた方には一生この髪型で暮らしていただきます』

少女の出したフリップには丁髷の絵が書いてあった

『イエスカノーでお答えください』

ワゴン車の中には100万円の札束がぎっしりと詰め込まれている

「100万円ねえ……」

「僕にしてみれば必要ないお金だし……」

「操緒にしても別に今すぐ欲しいっていうお金じゃないし…」

「というかあんなリスクを侵してまで100万円欲しくないわよ…」
あきれ顔のシンジ、智春、操緒、アスカ。アंकは智春が買ってきたアイスを食べている

「あいつ、ガラの野郎が作り出してるな」

意味深な言葉を言いつつ…

さて、ワゴン車の方に目を向けると奇術師に一人の男が尋ねていた

「本当に100万円貰えるのか？」

『はい。ただし、一生この髪型で過ごしていただきます』

「ならイエスだ」

男の答えを聞いたとき奇術師はベルをならす。それと同時に男の頭がピンク色の煙に包まれて丁髷頭になった

『どうぞ100万円です』

奇術師から100万円を受け取った際に男の額からセルメダルが飛び出したが、誰も気づく物はいなかった

奇術師から100万円を受け取ると男は帽子をかぶる

「こんなのこうやって隠しちまえば良いんだよ！」

だがすぐに帽子は飛んで行ってしまった

『言いましたよね？一生その髪型で過ごしていただきますと。なので帽子等も使い物になりません』

軽く爆弾発言もあった物の、本当に100万円貰えると分かった人々はすぐさま殺到して行くのだった

その頃メダルの塔にある天秤の透明なタンクには次々とセルメダルが溜まって行く。そしてその傍らでは奇術師がコアメダルを石盤にはめている

「これは一体？」

「まあ、見ておれ。そうすれば分かる」

そしてタンクが満タンになったとき、丸盤が裏返る

その頃、駅前では…

「なっ!?!」

いきなり地面が丸く区切られたと思うと、アंक、シンジ、智春、アスカの4人と操緒が分断されてしまう

「一体何が!?!」

「お兄ちゃん!?!」

シンジから連絡を受けたセツナとついでに和葉が漸く到着。だがすでに地面は上空に上がって、裏返ったのだった

「これって、トモ兄の荷物?」

「あ、オーズドライバーをトモが拾った限りだった!?!」

「でもバースドライバーはあるよ」

操緒にはオーズドライバーと入れ替わりにバースドライバーが、智春はオーズドライバーが渡ってしまったようだった

「シンがいなくなったと考えるとWも使えないか…。どうしたものか」

セツナはメダルの塔がある地点を見据えて呟いた

~~~~~

「嘘だろ…」

シンジ達が見た光景。木造の家々や長屋、そしてそれを見下ろすかのように立っているのは立派な天守閣を抱く城

江戸時代にタイムスリップしたのだった



## WEDDING 將軍と21のコアメダル

江戸時代にタイムスリップしてしまったシンジ、アंक、智春、アスカの四人。さらに駅前にいた一部の人々も巻き添えを食らったらしく、江戸の街に不釣り合いな乗用車が停まっていた。さらに事態は深刻なようで…

「あれって…」

「お…おめえら、どこから来た!!」

「分からねえよ!それよりここはどこだ!」

「はあ?將軍様のお膝元、江戸だよ!」

江戸時代の人々と現代の人々とのいざこざが起こっていたのだった  
「どうした物か…」

「まあ、ご愛嬌ってことで」

シンジとアスカはその状況を樂觀視していた。まあ、タイムスリップした人達と過去の人達のいざこざはある意味お約束だが

「でも、止めた方がいいよね。この時代だったら死人がでるかも…」

「しょうがないか…」

時は江戸時代である。武士なんぞ介入してきたらそれこそ死人が出る事態になる。智春の意見にシンジは賛同し、いろんな物が飛び交う中に割って入って行くのだった

~~~~~

さて、メダルの塔の中では夏目とガラが話していた

「成る程、時空を入れ替えるのか。そういえば、ここもそれで移動してたな…。そして江戸時代…あの髪型はそう言う訳か…」

と、そこに奇術師がベルをならしてくるが…

「俺はあの髪型にはならないからな?」

すぐさま拒否するのだった

「ふむ。残るはクジャクとコンドル。それに紫メダルか…」

そういうとガラはまたもセルメダルを実験器具のような物の中にいれる。すると今度は猿、虎、狸、蛇の特徴を持った合成ヤミー、鵜ヤミーが誕生した

「ヤミー…か」

「ゆけ。コアメダルを回収してこい」

ガラがそう言った後、鵜ヤミーの足下にメダルのような紋章が展開され、鵜ヤミーは転送された

~~~~~

という訳で江戸時代。シンジと智春は現代の人々と江戸時代の人々の争い―（？）を止めに入っていた

「まあまあ。皆さん落ち着いてって」

「そうですね。そんな争ったって何にもならないですって」

「そんな事言ってもよお！あんな格好してりや怪しむに決まってるだろ！」

「俺達は人間だって、何回言えば分かるんだ！」

どちらにせよ止める事は困難だろう

「ダーメダこりゃ」

「…この感覚…ヤミーだ！」

「え？」

アスカはもはや諦めたような表情で笑い、アंकは険しい表情で智春とシンジに告げた。その瞬間、メダルのような紋章が現れ鵜ヤミーが現れる

『オーズ、アंक、コアメダルを貰うぞ！』

左腕にある髑髏を動かして喋る鵜ヤミー。それを見たアंकは

「おい智春！お前、コアメダルはどうした…？」

「あー、ごめん。荷物と一緒に置き去りにしちゃった…。あ、でもトラとバツタはあるよ」

「タカはどうした！」

「ごめん。どつかで落とした」

「おい！」

智春に尋ねたが、見事にコアメダルが足りず戦闘不可。とりあえずコアメダルを持っている智春とアंकが戦闘を行なうのはかなり難しいようだ、となると…

「俺だけかよ…」

「ごめんねシン」

必然的にシンジに役割が回る事になる

「リングはあるし、大丈夫か」

シンジはロストドライバーを腰に巻き、紫電属性のリングを指にはめ炎を灯し、ジョーカーメモリのガイアウィスパーをならす

「ジョーカー！」

「変身！」

「ジョーカー！」

切り札の音楽と雷撃が一つになる。Wに似ているが、黒と紫が基調となりセントラルパーションが存在せず、所々が刺々しくなり、角はWを模した物にさらに二本追加されている。仮面ライダーライジングジョーカー、ANGEL ATTACKにて多くの戦績を残した仮面ライダーである

「さーてと、久しぶりにいきますか！」

碓家に伝わる宝刀・紫電（メモリの力でその柄の部分にはマキシマムスロットが追加されている）を構えて鶴やミに切り掛かる

「はっ！はっ！」

「よっ」

だが流石は猿のモチーフが入っているだけがあり、素早い動きでRジョーカーの斬撃を避ける

「碓流斬魔術一式…」

紫電に紫色の力が溜まって行く。無論紫メダルの力ではなく、ジョーカーメモリの力だ

「魔斬一刀両撃!!」

紫電を一気に高速で振り下ろす。流石に対処出来ずに鵜ヤミーがセルメダルをまき散らしながら吹っ飛ぶ

「うわああああ!？」

周りにいた人々は怯え、逃げ惑っているのである程度人的被害は押さえられる。…筈だった

『ふん!』

体勢を立て直した鵜ヤミーの口から放たれた火炎弾がRジョーカーに放たれる。Rジョーカーなら避けられる攻撃だったが

「ぐわああああ!!」

避けなかった。後ろには隠れていた江戸時代の人々の姿があったからだ

「ぐ…」

「シンジ!」

「今出たら危険だ」

アスカはRジョーカーに駆け寄ろうとするが、すぐに智春に引き戻される

『コアメダルを寄越せ!』

鵜ヤミーは左腕の髑髏をアスカ、智春、アंकが隠れていた場所に放つ

「ちいっ!!」

アंकは何故か分離可能な右手を飛ばして対抗するが…

『ぐっ…があっ…!』

力負けしてしまい、クジャクとコンドルが奪われてしまう。この時点でアंकの中にはクジャクとコンドル。そして自身を意志があるタカメダルだけとなる

『貰って行くぞ』

メダルのような紋章が鵜ヤミーの足下に現れ、鵜ヤミーは消えた  
「つつ…つつ…」

何は逃れたが、シンジは軽く火傷を負い、アंकもコアを奪われた

が故に若干苦しそうだった

~~~~~

所変わって現代。一回、学校に戻ったセツナ達は科学部のメンバーに状況を説明。丁度科学部のメンバーもニュースを見て向かおうとしていた所らしくセツナ達は科学部一行を現地に連れて行くのだった
「ほー、凄いなこりゃ」
一応部長代理である樋口は黒森のある場所に張られた結界を見て目を輝かせていた

「この中に碇君達がいるんですか？」

「それが違うの。シン達は今、行方不明。トモとアंक、それにアスカも…」

嵩月奏の問いに操緒が返す。和葉はセツナと共に結界の破り方について、の検索を始めている。

「おい、操緒ちゃん。今なんて言った？」

操緒の返答を聞いていたのか樋口が操緒に問いかける

「え…それにアスカも…」

「その前」

「トモとアंक？」

「智春が戻ってきてるのかよ！」

操緒がさらりと言っていたので嵩月は気づかなかったようだが、智春が帰ってきているという真実をここで科学部のメンバーは初めて知ったのだった

「トモ兄の事は後でにしてくれ。今は別次元に飛ばされたシン達がどうすれば戻って来れるのか。それと、この結界はどうしたら破れるのか…。ってあれは！」

セツナが指し示した方向には空中に上がる地面の姿が

「おおお！何が起こっているんだ！」

「これで2つ目…。次はどこと繋がるんだろ…？」

大騒ぎする樋口と険しい表情の和葉であった。ちなみにこの時入れ替わったのは恐竜時代まった中のアメリカだったことを追記しておく

「で、翡翠。なにか分かったのか？」

「一応ですけどね。あの結界には一部分だけもうい所があります。そこに強力な一撃を…例えるならば黒鐵の黒の剣撃や白銀の白の剣撃に相当するくらいの。弱くてもダメージが蓄積されればどうにかなりますけどね」

ここで機巧魔神アスラ・マキナの話題が出たが、今この世界には機巧魔神はない。となると必然的に仮面ライダーの力が一番有効なのだ

「オーズドライバーさえあれば、機巧魔神コンボで何とかなかったかもしれないのが…しょうがないか」

「どうします？」

「とりあえずカナ姉、焰月を使ってみて

「分かりました…。焰月！」

嵩月の持つネックレスより現れるは灼熱の炎で作り上げられた刀。嵩月家の守り刀・焰月。悪魔の存在しないこの世界では死ぬ気の炎と同じような原理で悪魔の能力と同等の力が発揮されるようになっているらしい

ともかく放たれる地獄の業火の一撃はセツナが示したポイントに向かって行くが…

「ダメか」

パワー不足なのかどうなのかは分からないが結界には特に何の変化も無かった

「兎に角、シン達が自力で戻ってこようがこまいが結局この結界は壊さなきゃならないし、いろいろ試してみよう」

セツナの主導の下で科学部は結界の破壊の方法を探すのだった

〃〃〃

所変わって江戸時代

とりあえず騒ぎが一段落すると、またも始まっていた。見た所力ゴやらざるやらが飛び交い、車を盾にして防御したりといういろいろやっているようだ

「皆さん、落ち着いて」

「お…お前だつて人なのか！あんな姿になりやがつて！」

「それにそちの男の腕！い…一体なんなんだ！」

「え…」

シンジが止めに入るが逆に怯えられる一方だ。どうも不可抗力だったとはいえ変身したり怪人化したりしたのは拙かったのか

「まあ待て。彼らは危害を加えたりしない」

そんな状況で江戸時代の人々をいさめたのは一人の武士だった

「だけど新さん…」

「思い出してみろ。あの時、避けられる攻撃を彼は避けようとしなかった。人が後ろにいるという事に気づいてな」

新さんと呼ばれた武士の言葉に納得したのかおとなしくなった人々。そしてシンジ達に名乗る

「俺は貧乏旗本の三男坊徳田新之助だ」

「碇シンジです」

「惣流アスカです」

「夏目智春つて言います。で、こっちはアंक」

「見た所、そちの人達も含めて日本の人ではないな？」

「あー、まあ、そんな感じですかね…？」

「んなもんでもいい！行くぞ！」

徳田の問いに曖昧な返事をする智春。そんな智春の手を引いて、アंकはその場を離れたのであった

「ん？これは…」

その時落として行ったセルメダルを徳田は拾った

（まさか…）

何か思い当たる節があったのか、徳田もまたその場を去ったのだった

「アंक、大丈夫？」

「ちつ。コアを二枚持ってた。次に狙われるのは…」

「分かってる。僕の紫メダル」

紫のコアメダルを体内に宿したが為に恐竜グリードになってしまった智春である。次にガラが狙うのは紫…つまり自分のコアメダル

「そう言えば、トモ兄がグリードになってるのは分かってるけど、コアメダル何枚あるの？」

「プテラ4、トリケラ3、ティラノ3の10枚。うち意識を宿したコアがプテラ」

本来なら9枚で誕生する筈なのだが、智春の場合は事例が特殊なためこうなっているのだ。ちなみにコアが揃っているため完全な状態なのだが、とくに特別何かするわけでもない

「兎に角、今日の寝床を探そう。多分、今日一日で戻れるとは思わないし…」

「この格好もなんとかしないとね」

とりあえず現代の格好は結構目立つ。どこか適当な所でこの時代の服を調達しなければならぬのだ

「とりあえずさ、一回入れ替わった所に行ってみようよ。知り合いがいるかもしれないし」

シンジの意見で入れ替わった現代の地域に行ってみる。するとそこには…

「…天堂屋？」

駅前の商店街の一角もここに来たようで、運良くリイマジカブトである天堂ソウジの実家であるおでん屋天堂屋があった

「中に入ってみるか…」

アंकが扉を開ける。すると

「いらつしゃい！…おつ、シンジくんに惣流君、アंकも。お、智春君帰ってきてたのか？」

現代の人々だろうと江戸時代の人々だろうと、笑顔で接客する天堂

ソウジの姿があった

「いやあ、びっくりしたよ。何か空が回ってるなと思ったらいつの間にか江戸時代とはな。ははは！」

（そうだった、この人は何が起こっても動じない人だった）

流石は天の堂に座す男。滅多な事では動じないのだ

「で、何の用だい？」

「えーっと、見ての通りなんですが江戸時代にいると僕ら浮くんで一晩泊めてもらってもいいですか？」

「別にかまわないぞ？マユやおばあちゃんは買い物に出たから多分この事を知らない筈だし、今日戻れるという保証はないからな」

「ありがとうございます」

ソウジは快くシンジ達を泊めてくれるようだった

「それじゃあ、少しお店を手伝ってくれるか？俺一人だと大変だからなあ」

「あ、それじゃあ僕がお鍋見張つときます」

「じゃあ僕は接客つと。ほら、アंकも」

「ちっ、しょうがねえな」

「惣流君も接客を頼む」

「はい！」

泊めてくれるのだからやっぱりするわけにはいかないと、シンジは厨房に、智春とアंकそれにアスカは注文をとり始めた。まあ結局はがんも、大根、卵のおでんしかないのだが

さてその一方で現代で結界を破壊するのに力を入れている科学部はと言うと…

「ファング！マキシマムドライブ！」

「ファングストライザー！！」

セツナがロストドライバーファングメモリで変身した仮面ライダーファングが結界に対してファングストライザーを放つがまったく効果が見えない

「ダメですか…」

「みたいだ。樋口先輩、どうです？」

「んー、確実にダメーじは入ってるんだけど、これと言う決め手が無いんだよなあ…。もう少し出力が高ければ…」

「出力…か」

一瞬フアングは死ぬ気の炎の同調も考えたが今現在氷河属性のシモンリングを持っていない以上は使えない

「ツインマキシマムは危険過ぎる…。後考えられるとすれば黒鐵だが…今は使えないし、万が一使えたとしてもトモ兄がいらないとな…」

「バース・デイだったら？」

フアングの呟きに和葉はそうこぼした

「バース・デイ…そうか！その手があったか…！」

フアングは何かひらめいたかのように智春のスーツケースを開く

「バースドライバー…これなら行けるかもしれない！」

「貸して、操緒がやる」

バースドライバーを腰に巻く操緒。そしてセルメダルを投入し…

「変身！」

グラップアクセレーターを勢い良く回した

「カポーン」

~~~~~

所変わって江戸時代。既に夜は明け朝になっていた

「また行くんだろ？頑張れよ」

「ありがとうございます、ソウジさん」

ソウジに見送られシンジ、アスカ、智春、アングの4人はまた江戸の街に向かう

そして川に掛かる橋にさしかかった所で、鵜やミーと無数のナイト兵が姿を現した

『オーズ、お前のメダルを貰う！』

「そうはいかないよ」

智春はオースドライバーを腰に巻き、トラとバツタのメダルを装填する

「智春、一か八かの賭けだ。それを忘れんじゃねえぞ？」

「分かってるって」

アंकはそう智春に念を押す

「ぐっ！」

そしてアंकはコアメダルだけの姿になる。タカメダルは智春の手のうちへ、クジャクとコンドルはアスカの元に飛んで行く

「行くよ…アंक！」

タカメダルをオースドライバーに装填し、オースキャナーでスキャンする

「ジョーカー！」

シンジもジョーカーメモリのガイアウイスパーを鳴らし、ロストドライバーを腰に巻いた後、ジョーカーメモ리를装填する

「変身！！」

「タカ！トラ！バツタ！…タットツバ、タトバ、タ・ト・バ！」

「ジョーカー！」

オースTTBとRジョーカーはそれぞれメダジャリバーと紫電を握るとナイト兵の大群に突っ込んで行く

「はっ！はあっ！」

「てやつ！」

ナイト兵一体一体はそれ程耐久力や力がある訳ではなく倒すのは楽だが、それが束になるとかなりの強敵である。ましてやそこに鶴やミーもいるのだ

「碇流斬魔術二式：地獄覇斬撃！！」

Rジョーカーは紫電を地面に突き立てる。それと同時に広範囲に渡って衝撃波が発生しナイト兵をセルメダルに還元する

「くそっ、数が多い！」

「このままじゃ…キリが無い！」

オーズTTBとRジョーカーだけでは手が足りない。このままでは体力の消耗やらで負けるどころか、智春のコアメダルも奪われてしまう

「どうすれば…」

そう言いながらも倒して行か無ければならない状況である。次々とナイト兵を蹴散らして行くがキツイ物があると、そこに蹄の音が聞こえてくる

「徳田さん？」

「助けにきたぞ。さあ」

徳田新之助。だがその身なりは貧乏旗本の身なりではない

「徳川家の家紋…成る程ね」

Rジョーカーは何かに気づいていたがあえて口には出さないようだった

一人だけではあるが戦力が増えた。やはりいるといたのでは大違いで負担は少なくなる

「危ない！」

だがナイト兵が女性を攻撃しようとする…が

「おりゃあ！！」

現代の男性が女性を助けた

「俺達もやるぞ！」

「…おおー！！」

一般人の皆さんも物干竿やら何やらを持ってナイト兵に応戦していく  
「うむ、皆味方だ。思う存分戦え」

「はい！ありがとうございます！」

徳田も日本刀を抜刀し、峰打ちではあるがナイト兵を倒して行く

「トリプル！スキヤニングチャージ！」

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

「せいやあああああああ！！」

「碇流斬魔術奥義：雷龍爆炎翔！！」

オーズバッシュと雷龍爆炎翔がナイト兵を一掃した。それとほぼ同

じときにほぼ全てのナイト兵が全滅した

『そんな…馬鹿な!』

鵜やミーは逃げ出して行く

「逃がさない!」

「いくぞ!」

「はい!」

オーズTTBはライドベンダーに、徳田は馬に飛び乗り鵜やミーを追った

『このお!!』

「はっ!」

鵜やミーの攻撃をうまくいなしてからオーズTTBはトラクロールで一撃を加える

「ヨーロッパの王家から徳川家に献上された物だ!受け取れ!」

徳田は懷から箱を取り出し、中にあった橙のコアメダルを智春に投げる

「コアメダル…でもなんで?」

「これだ」

さらに徳田が取り出してみせたのはあの時落として行ったセルメダルだ

「これを見たときにピンと来たんだ」

「成る程!…それじゃあ」

オーズTTBはオーズドライバーに橙のコアメダルをセットし、オースキャナーでスキャンする

「コブラ!カメ!ワニ!」

橙のコアメダルは爬虫類の動物達の力が込められたメダル…

「ブラカ〜ワニ!」

どくろを巻いたコブラの姿を模したコブラヘッド。亀の甲が腕に装着されたカメアーム。そしてワニの歯を模したワニレッグ

オーズの爬虫類系のコンボ、ブラカワニコンボだ

「いくよ！」

ワニレグにオーリングサークルから力が込められる

「はっ！はあっ！」

そして鵜ヤミーを蹴って行く。それと同時にワニの顎のようなエフエクトが展開され鵜ヤミーを噛み砕く

『このー！』

鵜ヤミーは左手の髑髏に紫色の炎を纏わして飛ばすが…

「よっと」

両腕のゴウラガードナーを合わせてガードする技ゴースルデュオを発動してガードする。それにより髑髏は破壊される

そうすると形勢不利と見たのか鵜ヤミーは火炎弾で攻撃する

「うわっ！？」

オーズBKWは横に回避する。そして笛を見つけた

「蛇嫌いではないんだけど…なんかね。まあ仕方ないか」

そしてその笛を吹くとコブラヘッドからコブラが現れる

『！』

鵜ヤミーも首に巻き付いている蛇で応戦するがこれもコブラの勝ちである

「成敗！」

「スキヤニングチャージ！」

地上を滑るように移動しながら橙色のオーリングをくぐり抜け…

「せいやあああああああああー！」

鵜ヤミーの目の前で飛び上がりオーズを包み込むように現れたワニの頭部のようなエフエクトを纏いながらはさみ蹴りを鵜ヤミーに炸裂させた。

オーズブラカワニコンボの必殺技ワーニングライド。鵜ヤミーは爆発しメダルになる

「やったねトモ兄」

遅れてやってきたRジョーカーは変身を解除する。オーズBKWも変身を解除してから徳田に向き合う

「ありがとうございます」

「なあに。頑張れよ」

徳田…いや、暴れん坊將軍徳川吉宗公は馬に乗り江戸城へと戻って行った

これで決まりだ！・俺が変身する

メダルの塔

「くっ、まさかこれ程とは…」

「さすがは僕の弟だな」

ガラは鷓やミーが倒されたところを見て焦り、夏目は悠長に構えていた

「だがもうすぐ最後の天秤が動く！そうすれば世界は終わりを迎える！」

そういつて天秤の方を見ると、タンクの中のセルメダルは後少  
しで満杯になる所まできていた

「それで、君に相談なんだが」

「なんじゃ？」

夏目はガラに対してこんな提案をした

「最後のセルメダルを智春…いや、オーズから手に入れてみないかい？」

「ほう…」

夏目の提案にガラはしばし考えた後

「ほほほほほ！面白い！オーズの欲望で世界を終わらせるか、それもまたよいのう。いいじゃろう」

ガラは奇術師を呼び出すとメダルのような紋章を奇術師の足下に展開して奇術師を転送した

~~~~~

所変わって江戸時代

アंकはあの後ナイト兵と鷓やミーが残したセルメダルを集めてコ
アメダルを投入することで復活した

智春達はというとともに戦ってくれた人々にお礼を言っていた

「ありがとうございます」

「おかげで助かりました！」

「いいっていいって」

とりあえず現代の人々も江戸時代の人々も楽しそうにしており、無駄な争いはなくなっただと一安心していた。とそこにベルの音が鳴り響く

「…お前は！」

現れるのはガラが送り出した奇術師だ

「あなた様の欲望のチャンスタイムです。元の世界に戻る代わりにここにいますべての方々が消えてしまいます」

智春に対して問いかけを行う奇術師。その問いに周りの人々がどうめく

「イエスカノーでお答えください」

「トモ兄…」

シンジは智春のことを心配そうに見つめる

「少しいいか？」

「何でしょうか？」

智春は奇術師にこんな問いを投げた

「僕だけじゃ何の意味もないんだ。この三人も一緒に…」

「ご家族ですか？」

「そんな…ことかな？」

智春がだした案は自分だけでなく、シンジとアスカそれにアंकも一緒に戻るのならというものだった

「ではいいでしょう。ご家族の皆様が戻る代わりにそれ以外の方々が消えてしまいます。イエスカノーでお答えください」

問いかけを訂正して智春に尋ねる奇術師。どちらにせよ周りはどうめく

「っ…トモ兄！」

「私たちだけ残ったって何にもならないでしょ！」

シンジとアスカは反論するが智春は聞き耳を持たない

「みんな僕たちを助けてくれたんだよ!!」

「…僕の答えは…」

智春が出した選択は…

「トモ兄!」

「イエスだ」

イエスだった

「ほほほほほ!!」

メダルの塔でガラは大笑いする。そう智春がイエスと言った瞬間にタンクには大量のセルメダルが落ちてきたのだ

「皆様、これにてサービスを終了させていただきます。この世界のご利用誠にありがとうございました」

現代の世界では奇術師がテレビを通じて世界の終わりを告げた

「そんな…」

「和葉! まだあきらめるな! もしこれを答えたのが、トモ兄かシンだったら…」

和葉は絶望した表情になるがセツナはまだあきらめていなかった。

セツナにはしっかりとした確証があったのだ

「トモ兄かシンだったら…世界を終わらせるようなへまはしない!」

一つは江戸時代につながり、二つ目は恐竜時代につながった。そしてもう一つの時空が歪もうとしていた…が

「なんじゃ! これは!!」

なんとタンクは満杯になるところかセルメダルが溢れ出したのだ。

ガラは驚愕の表情になる

「さすがは僕の弟だね」

夏目は満足げな表情になっていた

「どういうことじゃ! 貴様!!」

「ふふふっ」

夏目は意味深に笑っただけだった

「…あ…あれ？」

「消えてない？」

シンジとアス力は恐る恐る目を開けた。広がった風景は見慣れた現代のものではなく、まだ江戸時代だった

「そん…な…」

「僕の欲望をかなえるんだろ？」

驚く奇術師に智春は軽く笑いながら答えた

「それなら僕の欲望はこんなじゃ満たされない。紫グリードでもある僕の欲望はね」

紫が司る欲望は無。満たされていない状態が満たされているという矛盾した存在なのだ。だからこそ…

「常に無だからこそいくら満たされても満たされないんだよ。まあでもこれで僕の欲望は叶ったんだけどね」

「え…？」

「いっただろ？家族も一緒につて。僕にとっては世界中のみんなが家族だと思ってる。僕が誰か一人を家族と思えばみんなが家族なんだよ」

「そ…ん…な…」

智春の説明を最後まで聞いた後奇術師は跡形もなく消え去った

「馬鹿な！」

「ははははは！…さすがは僕の弟だ。まさに欲望の王、欲望は世界を救う…！」

メダルの塔ではガラは憤慨した様子で智春達の状況を見ており、夏目はというと高笑いして智春を賞賛した。いや、欲望をか

~~~~~

「ありがとうございました…！」

時空が元に戻っていく。メダルのように切り裂かれた時空がまた元

の状態に戻っていったのだ

そして元の世界に戻ると、近場にあった三台のライドベンダーをバイクモードにして智春、シンジ、アスカはそれぞれ乗った

「あ、そうだ。アスカ、これこれ渡しておくよ」

「え？」

シンジがアスカに渡したのは自分が持っている二つ目のロストドライバーと第14使徒との戦いときに惣流クラウスの幻影より渡されたスカルメモリだ

「イクサシステムはキョウコさんに取り上げられてるんでしょ？内緒だよ？」

そうアスカに言った後、シンジはダブルドライバーを腰に巻く

「セツナ、聞こえる？」

『シンか？戻って来れたんだな？』

「なんとかね。結界を破れる？」

『ミサ姉がバースに変身すれば何とかなるっぽい』

「それってC L A W S・サソリのこと？」

『ああ。トモ兄には悪いけど、セルメダルを1000枚使う。もろくなるところができるからそこから一気に入り込め！』

「わかった」

シンジはダブルドライバーを外す

「トモ兄、C L A W S・サソリを使っつてさ」

「オッケー。それじゃあ行くよ！」

シンジはロストドライバーを腰に巻き、ジョーカーメモリのスタートアップスイッチを押す

「ジョーカー！」

智春はオーズドライバーに漆黒、銀色、鋼色のメダルを順にセットする

「あれ？トモ兄、それって黒、鋼色、銀の順じゃなかったの？」

「機巧魔神のメダルは特殊なメダルなんだ」

「へ？」

「すべてのメダルが、すべての部位に対応している。そしてこれが機巧魔神メダルの本当のコンボ！」

智春はメダルをオースキャナーでスキャン。シンジもジョーカーメモリをロストドライバーのバックルにセットして倒す

「変身！！」

「ジョーカー！」

シンジはいつも通りRジョーカーに変身する

そして智春は…

「クロガネ！シロガネ！ハガネ！！クゝロゝガネツ！！」

コンボソングと共に智春のことをメダルのエフェクトではなく、漆黒の闇が包む

そして聞こえてくるのは奇怪な呪文。しかもそれはオースドライバ―から聞こえてくる

「闇より気高き欲望より出でし…其は科学の裁きを下す影！」

呪文が完成したのと同時に闇がはれる。そこにはオースが立っていただがその姿は今までのどのコンボにも当てはまらない。辛うじて機巧魔神コンボのクハシガネに似ているが細部の形状が異なっている。まるでオースの素体が機巧魔神・黒鐵の鎧を纏ったような姿。オーラングサークルはプティラのように出っ張っている

漆黒の装甲に縁の色が赤のオーラングサークル、緑色の複眼を持ったオースの姿

「仮面ライダー…クロガネオース！」

仮面ライダークロガネオース。機巧魔神・黒鐵と欲望の王オースが融合した新たな仮面ライダーと言っても差し支えないライダーだ

「行くよ、シン！」

「分かってる。アスカ」

「何、シンジ？」

「アスカはミサ姉達と合流して。ここから先は僕とトモ兄でやるから…分かったわ」

アスカはライドベンドーを走らせた

「それじゃあ、行くよ」

RジョーカーとKオーズは大量のタコカンドロイドが作り上げる道を上っていく

「エネルギー充填完了!!」

「カポーン ドリルアーム クレーンアーム ショベルアーム キヤピラレグ カッターウイング ブレストキャノン」

操緒の変身した仮面ライダーバースはバースドライバーにセルメダルを1000枚投入してグラップアクセレーターをまわす。するとバースCLAWSがすべて現れてサソリのような形状をとった。これがバースの支援メカCLAWS・サソリだ

「行くよ!」

CLAWS・サソリは尾の部分に虹色の力を溜め込むとセツナが見つけたもろくなっている部分に一気に放つ。すると結界にひびが入っていく

「ジョーカー! マキシマムドライブ!」

Rジョーカーはジョーカーメモリを紫電にセットしてマキシマムドライブを発動させた

「ライジングライダー スラッシュ!」

その一撃で結界は破壊され、RジョーカーとKオーズはメダルの塔の最上階に乗り込んだ

「はっ!」

最上階を警護していたナイト兵を蹴散らし、Kオーズはガラの前に立ちほだかり、Rジョーカーは夏目と奏を助け出す

「大丈夫ですか?」

「ああ。なんとかな」

奏は未だに寝ているため夏目だけがRジョーカーの問いに答えた

「ならいいです。早く脱出してくださいね」

そいうとRジョーカーはKオーズの横に立つ

「さてと、ガラ…だったけ?」

Rジョーカーはガラに向かいいつもの決め台詞をいう

「さあ、お前の罪を数えろ!!」

「科学の審判をお前に下す!」

さらにKオーズも即興であろう決め台詞をガラに対して言い放った  
「ふん! 貴様らに負けるほど、我は弱くないわ!」

そういうとガラはタンクから溢れ出したセルメダルを吸収して怪人態となる。そしてガラは長い腕を使ってKオーズとRジョーカーを吹っ飛ばすと自身も下におりた

「うおおおお!!」

Rジョーカーは紫電で切り掛かっていくが、強固な外装の為に効果があるとは実感しにくい

「シン! 離れろ!」

Kオーズは右腕に重力球を作り出す

「せいやあああああああ!!」

黒鐵の技でもある黒の拳撃がガラ怪人態に直撃する。威力は相当なものであり外装じひびが入ったと思うとそのいひびからセルメダルが溢れ出す

「ば…馬鹿な!」

すぐに傷口を塞いだが、Rジョーカーはあることに気がついた

「今一瞬、人の手が見えた」

「やっぱりな。あいつは人間を取り込んでいるんだ。セルメダルを取り込めたのも、肉体がないのにこの世界に復活できたのも、人という存在を取り込んだからだ。グリッドで言うコアメダルの役割を果たしてるんだろうね」

「それじゃあ…中にいる人を助けないと…」

「ああ。ガラは倒せない」

「その通りじゃ!!」

ガラは腕をのばして攻撃してくる。Kオーズはいくつか重力球を作り上げて軌道をそらすことで回避し、Rジョーカーは身軽なフットワークでよけていく

そしてKオーズは空間の一部を切り裂き、機巧魔神・白銀が使用している刀を取り出す

「こいつでもう一回ガラに傷を作る」

「つまり…」

「その傷から一気に引きずり出せ！」

「分かった」

Rジョーカーはいきなり変身を解く

「聞いてたる？セツナ。行くよ」

「ジョーカー！」

シンジが木陰に向かってそういうとダブルドライバーを巻き、ジョーカーメモリのガイアウィスパーを鳴らした

「ばれてたか」

「サイクロン！」

木陰から姿を現したセツナはサイクロンメモリのガイアウィスパーを鳴らした

「変身！！」

そしてエクストリームメモリが飛来する

「サイクロン！ジョーカー！！エクストリーム！」

シンジとセツナは仮面ライダーWの最強フォーム、WCJXに変身した

「行くよ」

Kオーズは刀を振るう。それと同時に空間の断層が発生し、ガラの外装が破壊される

「ぐおおおおおお！？」

「いまだー！！」

そこにWCJXが走って間合いをつめると、傷口から見た人の手をつかんで引つ張った

「ぐ…させるかあああああー！！」

ガラは必死で抵抗するが空間の断層に引きずり込まれないようにするので精一杯の状態で最強フォームに勝てる訳がなく、力負けして



しまい、取り込んでいた人：女性を引っこ抜かれてしまった

「よしっ！」

『トモ兄！』

「分かつてる！」

WCJXは女性を抱きかかえて跳躍してその場を離れる。それを確認したKオーズはメダルを再スキャンした

「スキャンングチャージ！」

「はああああああ…」

Kオーズの姿が変わる。漆黒の鎧に走っている金色のラインがすべて赤に染まり、背中には焰の翼が現れる。さあがらアスラクラインの世界で魔神相克者となった夏目智春が自身の機巧魔神である黒鐵アスラクラインと使い魔のペルセフォネが融合した姿である慟哭ドウターする魔神を模したような姿だった。そしてその右手には焰の刀焰月が握られている

「闇より気高き欲望より出でし：其は科学の裁きを下す影！」

「せいやあああああああ！」

またもオーズドライバーから聞こえてきた呪文とともにKオーズはガラに接近。そして一気に下段からX字にガラを切り裂いた

「ぐわあああああああああ！」

その一撃はとてつもなく重く、ガラは吹っ飛ばされた

「やった」

『それ以上にその力：実に興味深いな』

WCJXは意識を取り戻した女性をバットショットとスタッグフォンの案内で逃げるように指示し、Kオーズの様子を見に来たが、そのときにはもう戦闘は終わっていた

「これで、すべて終わる…ぐっ!？」

KオーズがWCJXの方を振り向いたとき、ガラの腕がKオーズを貫き、プテラ、トリケラ、ティラノのコアメダルが奪われる

「ぐっ…！」

「トモ兄！」

『まだ生きていたのか…!!』

メダルの塔。ガラは命からがらここに逃げきて、石盤に智春より奪った紫メダルをはめ込む

「変…身…！」

ガラがそうつぶやくと同時にコアメダルがガラに取り込まれていく。さらにあたりのセルメダルをすべて吸収し、さながらワイバーンのような姿をとった

『ぐおおおおおおお！…！』

そしてメダルの塔を破壊しながら飛び立つ

『うわっ、何でもありかよ…』

「トモ兄、いける？」

「大丈夫だ」

「ライオン！トラ！チーター！…ラッタラタラトラター！」

Kオーズはオーズラトラターコンボにコンボチェンジするとライドベンダーを呼び出し、さらにトライドベンダーにしてから乗る

WCJXはマシンハードタービュラーを呼び出して乗る

そしてオーズRTTとWCJXはガラ怪物態に向かって飛行していた

NEXT FOURZE &amp; EVA side！

## 仮面ライダーフォーゼ&EVANGELION（前書き）

ライダーが存在しない世界……。ここでは福音の巨人が世界を守っていた…。

しかし、ある一人の少年による世界の介入でこの世界のルールは脆くも崩れ去る。

そして現れるは、宇宙の力を宿したライダー

仮面ライダーフォーゼ& a m p ; EVANGELION 奇跡の価値は

青春スイッチ・オン！

## 仮面ライダーフォーゼ&EVANGELION

「たつく…あの馬鹿兄貴もいい加減にしてほしいよなあ…」

第9使徒マトリエルの襲来の翌日、門河テルの弟である門河コウガは自宅にある自身の部屋であるものを見つめながら一人愚痴った

「この世界はライダーがない世界…だからこそライダーシステムを持ってきてはならないって言ったのは兄貴のはずなのにな…」

コウガが見ていたものはフォーゼドライバー。この世界ではない別の世界で起こったANGEL ATTACKと呼ばれる世界征服をもくろむゼーレとそれを阻止しようとする仮面ライダー達の戦い。

このときコウガは仮面ライダーフォーゼとして戦いに参加していたその後フォーゼドライバーは調整のために兄であるテルが持っていた筈なのだが、マトリエル襲来時にいきなり現れ

『この世界にライダーの力が必要になった。コウガ、これをもつとけ』

そついつて渡してきたのだ。…一方的に渡されてテルはとつと帰ってしまったが

「まあ、愚痴つててもしょうがないか…。何が起こるのかは知らないけど…」

コウガは一度思考を中断して本棚の上においてある時計を見る。まだ登校までには時間がある。この後どうしようかと考えようとした矢先に扉が開く

「コウガ、ご飯って言うてるでしょ!」

「ん? ああ、悪い。考え事をしててな」

入ってきたのは赤みがかった茶髪をショートヘアにした少女、門矢マミ。彼女はテルの友人である門矢エンマの妹である。特に何もないのだがこの世界に滞在している

「まったく…」

「さーてと飯だ飯だつと」

まあとりあえず準備は後でいいかと考え、コウガは部屋を出るのだった

~~~~~

「あ、コウガ。おはよ」

「シンジか…相変わらず早いな…」

テーブルに料理を並べていたのはこの世界の主人公である少年、碇シンジ。そういえばあの世界にいたWの片割れも碇シンジだったなという関係ないことを心の中で考えつつコウガは並べられた料理を見る

「白米にみそ汁にほうれん草のおひたし、でもって焼き鮭か…典型的な日本人の朝ご飯だな」

「寝坊しちゃってさ、時間がなかったから」

「それでもこれだけ作れるんだから大したものだよ」

コウガの言葉にはにかみながら返すシンジ。そこにフォローを入れるマミ。とりあえず平和だ

「そういえばアスカは？」

「あー、まだ寝てるんじゃない？」

マミの問いにシンジは困ったような表情で答えた。基本的にぎりぎりまで寝ているアスカである。ちなみに本名は惣流・アスカ・ラングレーというが何もどっかの再構成が集まった世界にも同じような人間がいたが関わりはない

「んーおはよー」

噂をすれば何とやら、惣流・アスカ・ラングレー嬢ようやくお目覚めである

「あ、おはようアスカ。ご飯できてるよ」

この家に住んである全員が集まったところで朝ご飯を食べ始めるのだった

〃〃〃

はてさてコウガ達が平和な食卓を囲んでいる頃、特務機関ネルフの発令所は騒然となっていた

「どうなっているの？マヤ！！」

「分かりません！何者かによって警備システムがハックされています！」

唐突にネルフの誇るスーパーコンピューターMAGIがハッキングを受けたのだ。既にシステムの7割が奪われている

「くっ、ロジックモードに変更して時間を稼いで！」

「だめです！変更できません！！」

「そんな…。日向君！速やかにコウガ君達に連絡を！」

「りょ…了解！！」

リツコはMAGIを預かる最高責任者として対策を試みるがそんなのはお構いなしにハッキングは進行していく

「メルキオールがリプログラムされました！」

ついにMAGIを構成する三つのコンピューターのうちの一つが奪われた

『なーんだ、特務機関と聞いたからどれだけのセキュリティを持っているかと思えばザルじゃねえか。つまんねえな』

「…へ？」

いきなりスピーカーから聞こえてきた声に発令所はシンと静まり返る
『こんなので使徒の殲滅とかできるなんて世も末だな…興ざめだ』

「あ…ハッキングがすべて解除されました」

なんとここまでネルフに攻撃をしておいてまさかの試合放棄である。そして発令所の入り口から堂々としてきたのは白衣をきた少年

「こんなじゃこれの同型機に複数のハッキングを受けたらひとたまりもねえな。おい、構造を教える。俺が作り直してやる」

「き…君はいつたい…」

発令所に同窓と現れた少年にネルフ副司令冬月コウゾウは尋ねた

「俺か？俺の名は山谷ユキタカだ。覚えておかなくていい。後がめんどくさいからな」

尊大な態度で名乗るユキタカであった。さすがに職員一同哑然呆然である

「門河コウガにあわせろ。俺はやつに用があるんでな」

悪びれもせずに命令口調で話を続けるユキタカ。ふざけるなといったところだが相手はMAGIを完全掌握しかけた人間である。うかつに逆らえない

「それなら大丈夫よ。さつき日向君がコウガ君達に連絡したから」
「オーケー。ならいいだろう」

リツコの言葉に満足したのかユキタカは発令所を出ようとする
「待て！貴様、何が目的だ！」

静観していたゲンドウがユキタカに言い放つ

「聞いてなかったのか？門河コウガにあわせろといったんだ」

「なぜコウガ君にあおうとする！」

「決まってるだろ……？」

ユキタカはゲンドウ問いかけに対してこう言い放った

「俺の知識欲を満たす……ただそれだけだ」

仮にも特務機関の司令に対して尊大に答えるユキタカであった

「それよりもどこか丈夫で広いところに連れて行け」

「えーっとそれじゃあトレーニングルームがありますからそこにいきましよう」

オペレーターの一人である日向マコトはユキタカをトレーニングルームに案内するのだった

~~~~~

## トレーニングルーム

朝食の途中で呼び出しを食らったコウガ達はそれでもなお失火入りと朝食を摂った後、コウガの判断でトレーニングルームにきていた

「ねえコウガ、ここでいいの？」

「ああ。俺の予想が正しければおそらくここに来るだろうな…」

入り口前で仁王立ちするコウガ。なぜかの背中にはある恐怖の色が見えていた

「ここです…」

「ほー、なかなか広いじゃねえか」

そこにトレーニングルームの扉がひらいて現れたのはユキタカのそれを案内したマコトである

「それでは自分はこれで…」

「さて、戻るついでにここの技術者…いや、技術部の最高責任者を読んでこい」

「は…はい」

発令所に戻ろうとしたマコトを捕まえてさらに一つ指示を飛ばした後ユキタカは啞然としているシンジとアスカを無視してコウガに向き合った

「よう、久しぶりだな」

「俺は永遠にあいたくなかったんですがね…!!」

軽い口調のユキタカに対して投げやりな口調で話すコウガであった「そういうやつて。今回はお前にもきつと利益になるものだから」

そういつてユキタカは担いでいたリュックサックをおろすと中からスイッチを取り出した

「アストロスイッチ…」

そう、フォーゼの力となるアストロスイッチだった。現在使用可能なのは1番のロケットから16番のウインチまで。さらにユキタカが持ってきたのは、17番のフラッシュ、18番のシールド、19番のガトリング、20番のファイヤー、21番のステルス、22番のハンマー、23番のウォーターの合計7個であった

「さてと、さつさとフォーゼに変身しろ。そしてスイッチを試させてみる」

「命令形かよ…」



といってもギャラリーもいるし、ここは基本的にプライバシーを守つてくれないことは確かである

「…戦うときに使わせて頂きます」

「今やれ」

「この状況で？」

「…確かに無理か」

ただでさえ、仮面ライダーの存在を知らないシンジとアスカがいるのである。さすがにここで変身するのはまずいだらう

「ならいい。それと、こいつも作ってきた」

「何これ！ハンバーガーセット！？」

ユキタカが取り出したものに興味津々のアスカ。ハンバーガーとポテトフライとドリンクである

「おい、カメラとシザースかせ」

「はいはい」

ユキタカはそんなアスカを無視してコウガにカメラスイッチとシザーススイッチを要求。そして自分の持つフラッシュスイッチをそれぞれハンバーガー、ポテトフライ、ドリンクにセットしてスイッチを入れる。すると…

「何これ！シンジ！見てみて！かわいい！！」

形が変わったのだ

「アストロスイッチの力で偵察などを行う支援メカだ。カメラスイッチを使うバガミールにシザーススイッチを使うポテトヨキン、そしてフラッシュスイッチを使うフラシエキーだ」

胸を張って解説するユキタカ。とりあえず役に立ちそうだなと考えつつコウガはトレーニングルームに入ってきた気配に気づいた

「あ、リツコさん」

「あんたがここの技術部の最高責任者か？」

「ええ、そうよ。自己紹介が遅れたわね、赤木リツコよ」

「さっきも名乗ったが改めて、山谷ユキタカだ」

二人の技術者はがっしりと握手をする。その光景を見てコウガは頭

を抱えた

（リッコさんだけでも危険なのに…さらにそれ以上の危険人物が…  
！しかもその二人が手を組むなんて…！！）

「コウガ、大丈夫？」

「多分…」

さすがにコウガの心配をするシンジであった

「さてと、それでもってさっきコンピューターをハックしたときに  
情報は閲覧させてもらった。人形決戦兵器人造人間エヴァンゲリオ  
ンのパイロットは誰だ？」

「そこにいるわよ。コウガ君もその一人ね。ほら、自己紹介」

「あ、碇シンジです…」

「惣流・アスカ・ラングレーよ」

リッコに促されて自己紹介をするシンジとアスカ。ユキタカはそんな二人を見て一言

「こんな子供が乗ってるのか？」

「ええ。エヴァは子供…しかも14歳の少女しか動かすことが  
できないのよ」

「なるほどな…」

さすがに冷血って訳でもないユキタカである。自分たちよりも年下の  
少女少女が訳の分からない怪物と戦っているのだからそりゃショ  
ックを受けるであろう

「まあでも、あいつよかましかな…」

「同意」

ユキタカとコウガの脳裏には共通してある少年の顔が浮かび上がっ  
ていたという

「まあ、そんなことはどうでもいい。データによるとS2機関だっ  
けか？あの永久機関をプロトタイプの零号機以外に搭載したってな  
ってたが？」

「ええ。そうだけど？」

「あれは理論上ならプロトタイプにも搭載できるようになってた筈

だが？まさか出力を押さえていないとかないだろうな？」

「ちよつと待つて、なんであなたがそんなことを知っているの？」

「それは…」

ユキタカとリツコの会話にコウガが割り込んだ

「その人が、何やらいろいろな兵器や武装。それにS2機関の理論を構築した人間ですよ」

「それ本当なの？コウガ」

「嘘は言わない」

コウガの発言にシンジは恐る恐る尋ねるが、コウガはまるで諦めたかのような口調で返した

「ということは、あのヘルメットとかも？」

「ああ」

アスカも恐る恐るコウガに尋ねる。コウガはそれに即答した

「あんな簡単な理論が分からないなんてバカだな。という訳だ。俺の観点から言わせてもらうがまだあれの出力は押さえられる」

「そうなの？」

「ついでだからいろいろやってやる。技術部を全員集めろ、俺が直々に指導してやる」

「わかったわ」

ユキタカはそう言った後コウガ達に言う

「お前ら、学校はいいのか？」

「あー、そうだった」

珍しく真面目なことを言ったユキタカ。コウガは曖昧に返事をした後シンジとアスカにこういう

「とりあえず行くか。マミやレイも心配してるだろうしな」

「だね。ほらアスカも。いつまで戯れてるの？」

「はい」

コウガ、シンジ、アスカはトレーニングルームから出て行いった

「だてと、俺としては1週間以内に零号機へのS2機関の実装と大

気圏外戦闘用装備及び対空中戦闘用装備を完成・実装させたい  
な。きりきり動けよ」

ユキタカ主導のもとネルフ技術部の大改革が始まったのだった

## 奇跡の価値は

「おはよー！」

「遅刻よ！アスカに碇君！それにコウガ君も！」

現在時刻は二時間目と三時間目の間にある休み時間である。悪びれもせず堂々と教室に入ってくる三人に大して怒ったのは委員長である洞木ヒカリである

「あヒカリ、おはよ」

「全くもう…あれ？コウガ君は？」

「あー、屋上に行くつてさ」

登校早々屋上にサボりにいくコウガ。まあ実際の所コウガはこの世界の人間ではないのでこの世界で勉強する意味がないのだが…。それなのに成績もいいし

「おはようさんセンセ。例のあれ絡みかいな？」

「まあ、そんなところだね」

シンジに話しかけてきたのはなんだかんだで親友と呼べる中になった鈴原トウジである。ちなみに相方だった相田ケンスケは今現在コウガの手により病院送りにされている（マミの盗撮写真を売りさばっていたのが原因）

「それでもってセンセはこのこと知つとるんかいな」

「え？何のこと？」

「最近な、怪物が揺るになると出没するらしいんや。聞いた話によると人間がスイッチを使って変身したとか言うてな…」

「スイッチで変身する怪物？」

「あ、知らんかったらええんや。ほないな授業が始まるし席に戻るわ」

「あ、うん（まさかコウガが？違うよな…）」

~~~~~

屋上

コウガは一人でここにいた。そして腰にフォーゼドライバーを装着してスイッチを起動させる

「3…2…1…」

ベルトからカウントダウンが聞こえだす。そそいてゼロになると同時に…

「変身!!」

レバーを押し込んだ。そしてコウガをカプセルの用なものが包み込みその姿を変えていく

宇宙服を思わせる白いボディにロケットを模した頭部。仮面ライダーフォーゼだ

「まずは、これだな」

とりあえずフォーゼは17番のフラッシュスイッチをフォーゼドライバーにあるロケットスイッチを入れ替える

「フラッシュ」

そしてスイッチを押す

「フ・ラ・ッ・シ・ユ・オ・ン」

フォーゼの右腕に電球のようなフラッシュモジュールが装備される「おっと」

かなりの明るさであたりを照らし出した。校庭で体育をしていた生徒がざわつきだしていた

「これはまずかったな」

今度は右足のランチャースイッチを14番のスモークスイッチと入れ替えた

「スモーク」

そしてスイッチを入れる

「ス・モ・ー・ク・オ・ン」

スモークモジュールからは煙が吐き出された

「ロケット」

「ロ・ケ・ツ・ト・オ・ン」

フォーゼはロケットモジュールを使って空にあがるととりあえず適當なところまで飛んでいった

「危なかった…」

フォーゼは変身を解除。そしてコウガはほかのスイッチを見てみる
「20番のファイヤースイッチはステイツチェンジ用のスイッチだな…。それだったら実践で使った方がより有効か」

コウガはとりあえず校舎に戻り、購買で時間を潰すのだった

~~~~~

そんなこんなで昼休み

「はいアスカ、お弁当。シンジ君の分も」

「ありがとうマミ」

「ごめんね。いろいろ任せちゃって」

「いいのいいの。ノープロBLEM!」

アスカとシンジは弁当をマミから受け取ると屋上に上がった。それを物陰から見ると影があった

（畜生…惣流さん…!）

なにかスイッチの用なものを握った少年はシンジとアスカが仲良く屋上に上がるのを見ていたようだった

「お前には消えてもらっぜ、碇」

少年はそのスイッチを押す。それと同時に闇が少年を包み込み、星座のような光が現れる。そして少年は獵犬座の怪人、ハウンドゾディアーツになったのだった

『うおおおおお!!』

ハウンドゾディアーツは屋上につながる扉を破壊するとシンジに飛びかかる

「おっと」

ハウンドゾディアーツの武器は獵犬座の名にふさわしい俊敏性だが

シンジはコウガに鍛えられた反射神経でその攻撃をよけたのだ

『碇…お前は惣流さんと仲良くしゃがって…。お前じゃ惣流さんには釣り合わない!』

「釣り合う釣り合わないじゃなくて、互いの気持ちだと思っけどな」  
『なっ!?!』

いきなり気配もなしにハウンドゾディアーツの後ろにコウガは立っていた。腰には既に変身準備が完了したフォーゼドライバーがあった

「3…2…1…」

「変身!」

レバーを押してコウガは仮面ライダーフォーゼに変身する

「なにあのおにぎり頭!?!」

「おにぎりって…あれってロケットじゃないの?」

「俺の名は仮面ライダー…フォーゼ!」

アスカとシンジはコウガの変身に驚いていた。…主にフォーゼの頭について

フォーゼは拳をハウンドゾディアーツに突き出して…

「タイムンはらせてもらっぜ!」

言い放った

『ちっ!』

「逃がすかよ!」

「ウ・イ・ン・チ・オ・ン」

『ぐっ!?!』

逃げ出そうとしたハウンドゾディアーツをフォーゼはウィンチモジュールで拘束する

「チ・エ・ー・ン・ソ・ー・オ・ン ス・パ・イ・ク・オ・ン」

「うおりゃあああああ!」

さらに右足にチェーンソーモジュール、左足にスパイクモジュールを装備したフォーゼはハウンドゾディアーツを振り回して連続蹴りを浴びせる

「おりゃあっ!」



そして地面に叩き付けるとフォーゼはロケットスイッチを10番のエレキスイッチに変えてスイッチを入れる

「エレキ エ・レ・キ・オ・ン」

フォーゼの基本カラーが金色に変わり、手には専用武器であるビリザーロッドを持ったフォーゼエレキステイツにステイツチェンジした  
「行くぜ！」

フォーゼESはビリザーロッドのコンセントを左側にさす。そしてハウンドゾディアーツを斬りつける

「ぐっ！」

ハウンドゾディアーツも負けじとニードルを飛ばしてくるが…

「シールド シ・ー・ル・ド・オ・ン」

フォーゼESは18番のシールドスイッチをオンにしてそれを防ぐ

「ガトリング ガ・ト・リ・ン・グ・オ・ン」

さらにガトリングモジュールを装備して一気に放つ

「ぐっ！？ぐわあ！！」

「決めるぜ」

フォーゼESはシールドスイッチとガトリングスイッチをオフにする。そしてエレキスイッチをビリザーロッドに装填する。そしてビリザーロッドから警告音のような音が聞こえてくる。そして…

「リミットブレイク！」

「ライダー100億ボルトブレイク！」

フォーゼESはハウンドゾディアーツに向かって走り出す。そしてすれ違いざまに切り付けそれと共に強力な電撃を流した

「ぐわああああああ！！」

ハウンドゾディアーツは爆発。少年の姿に戻った

「まだラストワンじゃなかったからいいか…」

フォーゼESはゾディアーツスイッチを回収すると…

「じゃ、そういうわけだ」

「ロケット ロ・ケ・ツ・ト・オ・ン」

ベースステイツに戻り、ロケットモジュールを装備して飛去ったの

だった

「いったい何だったんだろ？」

「さあ？それよりもお弁当食べよ。時間ないわよ」

「だね」

フォーゼについては軽く流してシンジとアスカは弁当を広げるのだった

~~~~~

さて所変わってネルフ本部。ユキタカによる技術部の指導が始まってからいろんなところで技術部の面々がしごかれていた

「その出力はもつと押さえる！」

「え…これで限界です！」

「こうすればいいだろうが！これぐらい理屈が分かれば猿でもできる。お前は猿以下か！」

「ご…ごめんなさい！」

今はエヴァのプロトタイプたる零号機にS2機関を搭載するための実験なのだが、ユキタカにしてみれば猿でもできることを特務機関の技術部ができないことにユキタカは憤っていた

「それと、その肩の部分には何が入ってるんだ？」

「えーっと、近接戦闘用のプログレッシブナイフとニードルですが

…」

「ふむ…あの狭いスペースに入れるのなら考えたな。…あれって何かしらの追加装備はできるのか？」

「今までだと、バッテリーパックが搭載できるようになってました。あとはマゴロックスの鞘が…」

「よし、上出来だ。兵器に関して言えば十分だな」

ユキタカは何か満足げな笑みを浮かべていた

「俺は飛行ユニットの完成状況を見に行く。サボってたら実験台にするからな？」

ユキタカの威圧にその場にいた全員が首を縦に振った

「それじゃあな」

ユキタカが白衣を翻して部屋を出ていったあと、緊張が和らいだ
「なんだろうな…あの威圧感は」

「赤木博士とはまた違うそれだよな…」

「どちらにせよ、実験台はいやですよ…」

「頑張りますか」

実験台にはされたくないという一心で作業に取りかかる技術部員であつた

「んー？電話か」

飛行ユニットの開発現場に向かつていたユキタカの携帯が鳴った

「もしもしー？」

『あ、もしもし、コウガです』

電話の相手はコウガだった

「何のようだ？今忙しいんだが」

『ゾディアーツスイッチが手に入っただんですけど…「速やかに持って来い！！」…わかりました』

最後まで要件を聞かずにコウガに命令したあと、携帯をきるのだった
「くくく…この世界は俺の知識欲を満たしてくれそうだなぜ…！！」
だいぶいっちゃってる目で不敵に笑うユキタカはそのまま飛行装備
作成中の研究室に入るのだった

（ゾクっ…！！）

「どしたの？コウガ？？」

「いや、何か寒気がしてな…」

「大丈夫？」

「ああ。嫌な予感はあるがな」

そのころ、悪寒を催すコウガがいたといなかったとか

くくく

それから一週間後

「ほー、さすがはこの世界最高峰とも言える技術者集団。理論と原理さえ分かっちゃうえばできるじゃねえか」

「あたりまえよ。ネルフを甘く見てもらっては困るわね」

あれから一週間、ユキタカによってしごかれた技術部の面々だったが、ユキタカの目標通りにことは進んだようだ

そして今、技術部メンバーとユキタカの目の前には既に試験運用段階に入った3機のエヴァンゲリオン空中戦用装備があつた

「零号機は白、初号機は黒、貳号機は赤、参号機はまだ未定ね」

「いや、これだけあれば十分だ。エネルギー供給は？」

「アンビリカブルケーブルの電源ソケットを改造してエネルギーを送り込めるようにしたわ」

「オーケー。上出来だ。翼の収納は？」

「元々は非常電源が搭載されていた箇所に縮小して収納できるわ」

翼の収納に関してはエヴァ量産型を参考にしているようだ。量産型の存在はこの世界だと公にはなっていないが

「それじゃあ、搭載実験と洒落込みますか」

「そうね。あら、もうこんな時間なのね」

「ほー、もう放課後か。コウガも来るだろうし実験準備を始めるか」「そうね」

現在時刻はちょうど帰りのHRが終わったところである。シンジ達の運命はいかに…？

~~~~~

というわけでシンジ達はというとちょうど帰り支度をしていた

「門河！お前、また授業をさぼりおって！このままでは進学できんぞ！」

「別に…この前も言ったと思いますけど俺は進学するつもりはありま

せんって」

この前というのは教育相談…というか三者面談のことである。コウガ達は名義上は副司令である冬月、レイはリツコが保護者なのだが、忙しい仕事の合間を縫って二人とも参加してくれたのだ

「そうだとってもな！」

「時間なんで帰ります。今日はネルフで実験があるので。失礼します」

担任の言葉を遮ってコウガは出て行った

「あ、コウガ！待ってよー！」

マミもまたコウガを追いかけて教室を出るのだった

さてネルフ本部

「あれ？今日は何にも実験がない日じゃなかったっけ？」

シンジはコウガが担任に向けて言い放った言葉に疑問を感じていたようだ

「あー、それがな。ちょっと前にユキタカさんから連絡がはいって今日、新しく新造したエヴァの特殊装備の実験をするらしい」

「特殊装備？聞いてないわよ？」

「ええ。司令も何も言ってなかったわ」

コウガの返答に首を傾げるアスカとレイだが、すぐにこうがは返答した

「そりゃそうだ。ユキタカさんが陣頭指揮を執って、技術部がこっそり開発してるんだからな。あと、零号機の起動実験もするそうだ

S2機関を搭載してな」

「なるほどね」

そんなわけで更衣室に直行するコウガ達であった

「零号機起動。S2機関稼働に問題なし。シンクロ率及びハーモニクス安定しています」

真っ先に行われたのはエヴァ零号機のS2機関搭載後の起動実験で

ある。結果は大成である。そして…

「よし、初号機と式号機も起動させる！出力にどれだけの差があるかを見てみる」

「了解！」

初号機と式号機も起動。なぜ参号機だけが免除なのかというと、エヴァの資料は基本的には参号機のパイロットであるコウガから渡されていたからだ。必然的に参号機からのデータが多くなる。そのため参号機は今回の実験に参加していない。飛行用装備に関しても参号機用は尽くされていないためこちらも免除である

ちなみにコウガは今現在トレーニングルームでトレーニング中である。何やら太刀ぐらいの長さのある木刀を持っていたようだに氣にしないこと

「ふーむ、出力は式号機とは20%、初号機とは40%違うのか。

プロダクトも正式機なりの出力調整があったようだな。初号機は試験機だからその分オーバースペック気味でも事足りる…か」

『エヴァンゲリオン全機、第3新東京市郊外に射出完了しました』

「よし、お前ら、コントロールレバーに新しく取り付けられているスイッチを押せ」

「え…？ああ、これが」

ユキタカの指令に戸惑いつつもスイッチを押す。すると背部装甲が浮き上がりそこから翼が展開された

「な…何よこれー！！」

「私…聞いてないわ」

アスカとレイは若干取り乱していた

「別に驚くほどのものじゃないと思うけど…」

一方、シンジは冷静に状況を把握していたようだ

「で、どうすればいいんですか？」

『んー？飛べ！って思えば飛べるぞ？』

「わかりました」

『おーい！早く測定の準備しろー！』

通信の向こうでユキタカが技術部の面々に激を飛ばしていたのはスルーして、シンジは心の中で念じる

（飛べ……！）

その瞬間、木々をなぎ倒すほどの衝撃と共に初号機の姿が消えたのだった

~~~~~

一方、コウガは

「ふう……」

素振りを終えたのか、コウガは汗を拭くと壁にもたれかかって座る
「今頃、飛行ユニットの実験が始まってる頃だよな」

そんなことをつぶやいた矢先にスイッチケースが警報を鳴らす

「ん？」

コウガはケースを開くと、ディスプレイを起動させる。スイッチケースは携帯型の通信機にもなっているのだ

「ゾディアーツ？その割には色が違う……？」

なぜかオレンジ色一色で染まったカメレオンゾディアーツが第3の郊外にから歩いてくるのだ。しかも一体ではなくざっと見ただけでも100体近くいる

「ちっ、急ぐか」

コウガはトレーニングルームを飛び出すと、車庫に停めてあったマシンマッシグラーに乗って現場に向かうのだった

青春スイッチオンで宇宙キター！！

「これって…まさか…！」

シンジと初号機はあの場所からあつという間に…

「宇宙に來ちやつた…！？」

大氣圏を突破して宇宙に來ていたのだった

「ほー、あの速度は第1宇宙速度を突破したな」

「凄いわね…」

発令所は啞然となっていた。ちなみにこの飛行専用装備に関しては事後報告という形でゲンドウをコウガがおど…お話しして認めさせている

「なるほどな…この力は我々には必要なものとなるだろう。ユキタカ君、礼を言うぞ」

「別に、俺はただ自分の欲望を満たしたいだけだ。礼を言われるほどのことはしていない。おい、赤いのと青いのもさっさと飛べ。比較実験ができん」

『そんなこと言われても…』

いつになく弱気なアス力であつた

『それより碇君、戻ってきて』

『そうだね。えーっと、こうすればいいのかな？』

すると今度は初号機は宇宙から姿を消して地上に降り立った

「ほう、まずまずの結果だな。これならたとえ敵が宇宙にこようと

…『大変です！インド洋直上の成層圏外にパターン青です！』…噂をすれば何とやら…か」

ユキタカが何やら思案している時に使徒襲來の報告が技術部のオペレーターであるマヤからされた

「総員、第一種戦闘配置。エヴァ全機は速やかに武装を用意せよ」
ゲンドウの指示で速やかに戦闘準備が進められる発令所。そこにコウガから連絡が入った

『こちら門河、現在芦ノ湖に大挙して押し寄せた怪物の進行を阻止中。今回の作戦式は日向一尉に一任してください。以上』

「というわけだ、日向一尉、頼んだぞ」

「はい」

こちらはいつでもオーケーのようだ

~~~~~

「妙な予感はあるが、一気に行くぜ！」

「3…2…1…」

「変身！」

マッシグラーに登場したままコウガはフォーゼに変身する

「さてと、使ってみるか」

フォーゼはロケットスイッチを20番のファイヤースイッチと入れ替える

「ファイヤー」

「ステイツチェンジだ！」

「フ・ア・イ・ヤ・ー・オ・ン」

フォーゼを炎が包み込む。ボディの基本カラーが赤に変わり、複眼は緑色。そしてその右手には専用武器であるヒーハックガンが握られていた

「行くぜ！」

ヒーハックガンをカメレオンゾディアーツ擬の集団に連発させる。

するとヒットしたカメレオンゾディアーツはすぐに燃え尽きてしまった

「?どうなってんだ？」

さすがに呆気ないと疑問を感じ得ないフォーゼFSだったが、ファイヤースイッチをフォーゼドライバーからヒーハックガンにセットする。そしてヒーハックガンから消防車のサイレンのような音が鳴り…

「リミットブレイク！」

「ライダー爆熱シュート!!」

圧倒的な炎の一撃で一気にカメレオンゾディアーツ擬が一掃された  
「嫌な予感がするな…」

と、そこにリーダースイッチが着信音をならす

「レ・ー・ダ・ー・オ・ン」

左腕にリーダーモジュールが装備される。そして回線を開くとそこ  
にはユキタカの姿が

『おい、今さっきスイッチチェンジしたろ?』

「(なぜ分かった!?) あ、ちゃんとデータは取ってあるんで」

『ならいい。後、まだ使っていないスイッチも出し惜しみするな』

「了解」

フォーゼFSはリーダースイッチをオフにするとファイヤースイッチもオフにしてベースステイツに戻る

「まだいるようだな…」

フォーゼの見据えるその先には新手の大群があった

「今度はユニコーンゾディアーツか…」

それはユニコーンゾディアーツ。先ほどのカメレオンゾディアーツと同様にオレンジ色に染上げられたものである

「今度は…これだな」

フォーゼはスイッチを取り出してあった のソケットに10番のエレキスイッチを、そしてドリルスイッチを23番のウォータースイッチに入れ替える

「エレキ ウォーター」

「ついでにこれもだ」

さらにリーダースイッチも22番のハンマースイッチに取り替えた

「ハンマー」

「さーで、出血大サービスだ！」

「エ・レ・キ・オ・ン ウ・オ・ー・タ・ー・オ・ン ハ・ン・マ・ー・オ・ン」

エレキステイツにステイツチェンジし、右手にはビリーザロッド、左足には蛇口のようなウォーターモジュール、そして左腕にはハンマーモジュールが装備される

「さあーてと…一気に決めるぜ!!」

まず左足で回し蹴りを行うフォーゼES。それと同時にウォーターモジュールから強力な水流が放たれ、辺りを水で濡らす。さらに、水流が直撃したユニコーンゾディアーツ擬は消滅していく

「おっと、危ない」

そこに頭部をレイピアのようにしてユニコーンゾディアーツ擬は攻撃を仕掛けるが、フォーゼESはいとも簡単にそれをよけ…

「おらよ!!」

ハンマーモジュールで叩き潰した

「次!」

ビリーザロッドのプラグを左側のソケットに差し込み、地面に突き立てる

「はっ!!」

ビリーザロッドから放たれた電撃が水たまりを伝ってユニコーンゾディアーツ擬を消滅させていく

そしてフォーゼESはビリーザロッドのプラグを真ん中のソケットに差し込んでからエレキスイッチをビリーザロッドにセットする

「リミットブレイク!」

「ライダー100億ボルトシュート!!」

ビリーザロッドから放たれた電撃を纏う斬撃がユニコーンゾディアーツ擬を一掃した

「とりあえず、一段落したところかな?」

フォーゼはスイッチを全てオフにして変身を解除した

「さてと、発令所に行きま…んだありゃ?」

マッシグラーに乗って空を見上げたときにコウガは何かが見えたらしい

「あれは…まさか!!」

「3…2…1…」

「変身！」

コウガは再びフォーゼに変身する。そしてリーダーモジュールでどこかに連絡を入れる。すると暫くしてからパワーダイザーという支援メカが現れる

「タワーモード」

そしてビークルモードからタワーモードに変形すると、マッシグラ―を乗せた

「3…2…1…」「Let's Go!!」

妙にいい発音でフォーゼが叫んだ後、マッシグラ―は宇宙に向かって打ち上げられた

)))

発令所

「目標を光学カメラで捕捉。映像をモニターに回します」

オペレーターの手によりモニターに映し出されるのは、目玉のようなデザインが施された空の使徒、サハクィエルの姿だった。だが、どうも様子がおかしい

「常識を疑う形状だけど…」

「ああ。何か違和感があるな」

リツコとユキタカはすぐに察したようだ。そこにマコトが控えめに話しかけてくる

「いいですか？」

「なにもをかしら？」

「発進…」

「さっさとしろ」

ユキタカの返答を聞いたあと、マコトは軽く咳ばらいをして言い放つ  
「エヴァンゲリオン、全機発進!!」

その号令とともに、零号機は白の翼を、初号機は黒の翼を、弐号機

は赤の翼を羽ばたかせ、一瞬にして宇宙にあがった

~~~~~

宇宙

「やっぱりな…」

ロケットモジュールを右手に装備したフォーゼは、自身の目の前にある使徒の姿をみて呟いた

「こいつ…アストロスイッチ…いや、ゾディアーツスイッチを取り込んでやる…」

そう、リツコやユキタカが感じていた違和感というのは、サハクィエルが純粋な使徒ではなく、別世界の産物を取り込んでいたがために、この世界の異端分子となっていたことだった

「そしてもう一つは…」

フォーゼが後ろを振り向くと3機のエヴァの姿があった

『コウガ!』

「お前ら、くんじゃねえ!!」

リーダーモジュールで初号機からの通信お受けしながら、フォーゼはそう言い放った。だが、時既に遅し

『何よ…これ…』

『私、聞いてないわ…』

「ちっ…!」

いきなり現れた銀色のオーロラがフォーゼと3機のエヴァ、そしてサハクィエルを飲み込んだのだった…

NEXT FOURZE&OOO&W&
DECADE NOVRL WAR COSMO!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2504y/>

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー フォーゼ&OOO

2011年12月27日21時50分発行